

父さんは、 足の短いミラネーゼ

徳山てつんど



来た、見た、住んだ、はまった!

仕事をし、豪快に食べて飲んで、自然の中で優雅に遊ぶ。
海を越えた地は、日本とはまた違った“素晴らしさ”と“驚き”に満ちあふれていた。
日本のビジネスエリートが、イタリア、フランスなどヨーロッパ諸国をはじめ、
世界各地に赴いた体験を鮮やかに描き出した愉快的エッセイ集。

地球はまだまだ広い。そして人生は楽しむためにある!

文芸社 ©定価(本体1,000円+税)



目次

目次

「父さんは、足の短いミラネーゼ」

1章 乾杯、ミラノ！

ミラノ到着
ミラノ生活
ミラネーゼ・ナンバー「MI」
愉快的な友達、スキー狂のサンモリッツ
愉快的な友達たちのカメラ
国外退去、ジンデルフィンゲンへ
ミラノからのスコットランド出張

2章 フランスの風と香りを吸って

南フランス・モンペリエの思い出
パリ、初めての
モスクワ・シェレメチボ空港

3章 アメリカでの遭遇

ニューヨーク州
ホワイトプレーンの冬
怖かったフライト
合衆国国道一号線
オースティン
アメリカ西海岸
タホ湖

4章 地球を歩き続けて

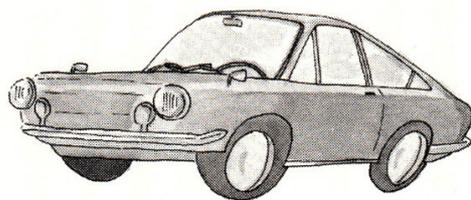
ブラッセル近郊・ラ・フルブ
仕事でのオーストラリア
香港

あとがき

乾杯、ミラノ！

乾杯ミラノ！

乾杯、
ミラノ！



ミラノ到着

ミラノ到着

ホテル・アダム

僕が始めてイタリアのミラノ・リナーテ空港に降りようとしていた時、イタリアについて僕が持っていた印象は、完全に裏切られていた。「太陽のふりそそぐ、明るいイタリア」なんてものは、そこにはなかった。空港上空を旋回する飛行機の窓からは、時々、ふっと見える滑走路以外、霧雨がさっと窓の外を流れさるだけで、白い世界に閉じ込められて何も見えない。霧の中での長い時間が過ぎていた。

ミラノ・リナーテ空港は、その日霧に閉じ込められ、着陸にはかなりの時間がかかった。滑走路を確認するためにアタリアのパイロットは、辛抱強く視界の開くのを待っていたのだ。シュトゥットガルト空港を飛び立って、スイス・アルプスを越えた頃は、明るい太陽が足元の氷河や山たちを美しく見せてくれていたのに。イタリアという地中海気候の、温暖な美しい街、ミラノが僕を待っているはずだった。けど違ったのだ。深い霧の中に隠れて、ミラノはその姿さえ見せなかったのだ。

リナーテにやっとこさ下り立った僕は、イタリア初めての夜を、小さなホテル・アダムで過ごした。ホテル全体が、日本では嗅いだことのない香水のような匂いに満ちていて、外国なんだという実感がした。

出迎えてくれたジョルジョが、明日朝、迎えに来ると言って帰ってしまった後、じっとしていられなくて、ホテルでドウオモへどういくのかを聞いて、興奮している自分を感じながら僕はでかけた。体は時差ボケでちょっと辛かったが、夜のミラノの空に聳えるドウオモの尖塔を見上げて、本当にヨーロッパに来たんだなと思った。ドウオモ広場やエマニュエルのガレリアを歩きまわって、ミラノの匂いを吸ってみた。

ホテルに帰って食事をした。ミネラル・ウォーターを飲みながら、前の道路、ビア・パルマノーバを突っ走る車の音を聞いているうちに、いつの間にか眠っていた。夢の中で赤や青の光がくるくる回転しているのが見えた。

イタリアのミラノに着いたのは1月だから冬の真最中。ミラノは日本で思っていたイタリアのイメージとは、遠くかけ離れた暗い深い霧の季節だった。近くのポー河から立ち上る霧と街のスモッグで、11月から翌年の四月までは太陽を見ることできない。昼間でもライトをつけた大型のブルマン・バスがぬうっと霧の中から現れて来る。こんな陰鬱な霧のなかで、とても印象的だったのはピアッツァーレ・ロレートのモッタの店だった。明るい店が大きなロータリーに面していて、暗い霧の中で輝いていたこと、店の中の人達が明るい照明のなかで、レモン色にとっても明るく見えたことだ。

1月は本当に寒い季節で、太陽が無いので昼間も車はライトを点けてゆっくり動いている。僕の予想に反して、少々寂しい気持ちになったものだ。モッタで飲んだスプレムータ・デ・アランチャは濃厚なオレンジの味のする本当に美味しい飲み物だった。40年も前の、僕にとっての初めての外国生活の始まりだった。

ビメルカーテ

翌朝、ジョルジョの車に乗って、ミラノの郊外、ビメルカーテにむかう。I社がミラノのサイトをここに新しくつくったのだ。普通のみちを100キロ以上のスピードで飛ばす。平たい地形のなかをポプラがすくっと立つ道に行く。

驚いたのは往復3車線であること。4車線ではなくて3車線の道路だ。右端は自分の車線。左端は対向車の車線。そしてなんと、真ん中の車線は対向車もこちらも、どっちが走ってもいい、追い越し車線なのだ。なんと追い越し車線を共用しているのだ真ん中の車線は、お互い、正面に向き合って車

を走らす。中央の車線に踊り出て、追い越しを始めたら、対向車が同じ車線に出て追い越しを始めても、自分か対向車のどちらが譲るまで向き合って進む。そして、ぎりぎりのタイミングで左右に避けあうのだ。びっくりした。怖かった。急に前に入られた車も大変だと思った。とても日本では考えられない道だ。車での通勤はちょっと考えなくては、と思った。

ミラノの外れにあるビメルカーテは田舎。広い平野の真ん中のちょっとした丘のうえに会社の大きな建物があった。周りは完全な田舎。イタリア特有のひよろつとしたホプラが風に揺れている。遠くにアルプスが白く見えている。車でミラノから30分ぐらいか。通勤用に2両編成のプーマン・バスがミラノから出ている。車はちょっと怖いから、始めはバスで通うことになった。

会社の朝は、まずエスプレッソから始まる。「ボンジョルノ」の後、何人かでエスプレッソのコーヒー・マシンのところに行く。大抵はだれかのおごりで、おごった人が最後にコーヒーを作る。コーヒー・マシンの前は毎朝人々の社交場だ。コンピュータの開発と製造サイトはとても広く、そのなかにオフィスがある。

僕が席を置くジョルジョの課は10人ぐらいのこじんまりした課。ボルギ、ペンシエリ（ミラネーゼ）、ベキアート（ヴェネチアーノ）らなど、とにかく若くて、イタリア人としては珍しく英語ができる、いわばエリートの卵たちだ。この課は新製品の開発のリエゾン・オフィスだ。大卒は少なく、彼等の大半は高校卒業後、電子もしくは機械金属の専門学校を卒業している。若くて、明るくて、冗談ばかりで笑いが絶えない。日本はとても考えられない職場だ。冗談を言っているのか、普通の仕事の会話をしているのか分からない。ジョルジョはちょっとおでこが出ていて、鼻のしたに髭をたくわえている。ペンシエリはちょっと太め。立派な口ひげと顎のひげが一体となったバルバを持っている。ボルギとベキアートは髭がない。やはり一番若いベキアートが一番のお喋りだ。身振り手振りを入れ、首を振って闊達に話す。話し始めたら止まらない感じだ。とにかく明るい連中で、なかなかいい感じの友達ができた。

昼飯はもっぱらカフェテリアだ。イタリアでは、会社でも昼食時にアルコールが許されている。昼食時にカフェテリアで、いいおじさんたちが鼻さきを赤くしてワインやビールを楽しんでいる。もちろん小瓶なのだが、なかには2、3本開けている人がいる。午後の仕事は大丈夫なのかと人ごとながら心配になる。ワインかビールとミネラル・ウォーター、それからパスタ類の一品、メインのビスケットかかビーフシチュウとかにほうれん草などの付け合わせ、サラダ、そしてチーズときて、プレートは満杯。仲間と一つのテーブルを囲んで賑やかな昼食だ。1時間の昼休みはほとんど食事で行ってしまう。ワインを飲んで皆と話しながらゆっくりした食事だ。「早めし」の日本の昼休みとはまったく違う。家族のこと、女友達のこと、美味しいレストランのこと、闇での買物のこと、旅のこと、なんでもかんでも話のネタになる。

食事の後で、日本と同じように楊枝をつかう風習があるのにはびっくりした。ビニールのストローを斜めにスパッと切ったような形のものとか、木で作ったのだとかを使う。ヨーロップで楊枝をつかうとは知らなかった。最後の仕上げはやはりエスプレッソだ。昼休みの時間が残っていれば、ちょっと外の空気を吸いに出る。ゆっくりと散歩をする。ほかの課の連中と挨拶するのはこんな時だ。とにかくお互いによく挨拶をする。

朝はみんな、時間にはちょっとルーズだ。就業時間になってからでもコーヒー・マシンの前で何分でも話している。しかし帰りは非常に時間に正確だ。終業時刻が来るのを、タイムカードの機械の前で5分も6分も列を作って待っている。日本にくらべると、何につけおっとりしている。こちらがイライラしはじめても向こうはおっとりだ。「郷に入っては、郷に従え」ってことで、慣れるしかない。そのうち日本にいる連中とペースが合わなくて、仕事の上で彼らがいらついてくることもしばしばだった。「Toku（僕の愛称）はイタリアづいちゃった」とよく言われたものだ。

トラットリア・トスカーナ

朝飯は近くのバールで菓子パンとコーヒーか、会社のカフェテリアでトースト（イタリアの食パン

は黒っぽい)とエスプレッソで終わる。

夜は友達に教えてもらったトラットリア・トスカーナで食べることになった。大体、7時半頃からが食事時間だ。普通のイタリア人は8時すぎからだから、僕は早いほうだ。時間はだいたい2時間はかかると思っていたほうがいい。トラットリアはリストランテより大衆的で安く親しみがある。リストランテはテーブルにテーブル・クロスがしてあるが、トラットリアは客がきて初めて白いコトンのテーブル・クロスをする。

食事のたのしさは、カメリエーレ(ウェイター)次第だ。クラウディオが、僕の席の係りだ。同じ時間に行くと、客もいつもだいたい同じ顔ぶれで、お互いに「ブオナセーラ」と声をかけて、ほとんど毎日同じ席に着く。自然とそんなふうで固定の席ができてしまう。ナチュラルウォーターとグリジーニとパンをもって、クラウディオが注文を聞きに来る。イタリアでは、食事のときに食べるパンは、柔らかいのはまずいパンとすることになっている。客の中にはパンの周りの堅い所だけ残して、中の柔らかい所を取り出してパンのゴムみたいにして捨ててしまう人がある。

この店のお勧めはトスカーナ地方の料理というわけだが、毎日のことだから飽きのこないものを食べることになる。必ずしもトスカーナ料理というわけではない。結果として、毎日食べるのは日本の定食屋みたいなメニューになる。要は定番だ。

まずはカラッファ(ガラスの水差し)入りの半リットルのロッソ(赤ワイン)。ときにはランブルス・セッコをボトルで頼む事もある。これは若干スプパンテ風で、しかし個性がある。僕の発見した大好きなワインになった。

アンティ・パストは、まさにクラウディオのお勧めが一番。その時期のベストの物を奨めてくれる。季節感のただよう一皿だ。たとえばアーティ・チョークのクリーム煮だったり、真っ赤なブレザオラとリーモネだったり、イチジクとメーロネだったり。ときには牛肉のカルパッチョだったり、とにかく楽しい。店の入り口には、今夜のアンティ・パスティのデモンストレーション・テーブルがあって、店に入った瞬間に今夜の素晴らしい前菜たちが出迎えてくれる。とにかくその種類の多さに感動だ。夏になると店は、店の前の歩道を広く占拠して、テントをはって店が歩道まで出っ張ってくるのだ。緑の植木たちをおいて、風が入ってきて快適だ。こんな時は、プロシュウト・コン・メローネがベストかもしれない。季節感溢れる食べ物だ。

プリモは定番が多い。スパゲッティ・アル・ポモドーロは定番中の定番。一番、店の腕前をみせてくれる。しかしトラットリア・トスカーナの一番の Pasta は「スパゲッティ・アツラ・プットニエーラ」だ。「スパゲティ・娼婦風」というのだからすごい。トマトベースなのだがモツアレツラと松の実、黒オリーブそしてカッペリのはいったソースで和えた上、ちょっとオーブンで焼いてある。熱々の一品でそんじょそこらには決してない。チーズのほかに、もっと別な何かが入っているのだが、僕には分からない。とにかく美味い。ほとんどこれで、おなかが一杯になってしまう。後になって、この店が潰れてから、同じ物をミラノでかなり探したけれど、同じ物は残念ながらみつからなかった。もう二度とあんなスパゲッティには、お目にかかれそうにもない。

セコンドは特に目立ったものはなかったが、すごいと思ったのは料理ではなくて、魚料理でのクラウディオのサービスの仕方だ。魚をナイフとフォークでさばくのは、僕はとても苦手。しかし、クラウディオは僕のテーブルの側に客に見せる調理台を持ってきて、その上にキッチンで料理した魚を持ってきて、目の前でさばいてくれる。目の前でナイフとフォークで上手に皮を剥ぎ、骨を取り、たべられる状態にして、僕の皿に盛ってくれる。そして料理からこぼれ出たソースをかけて、必ずレモンで仕上げしてくれる。見ていなくても大感激だ。それでつい魚を食べたくなってしまうそして、こんな所がチップの金額の差になってしまう。チップは決して義務や習慣ではないのだ。サービスの善し悪しにたいするある種の感謝なのだ。

チーズも楽しみの一つだ。ミラノの近くの村、ゴルゴンゾーラで作られるチーズは特別に匂いが強い。ピカンテはちょっと匂いが消えない。しかし美味しい。パンに塗って食べるのもいい。問題は、ここまでどうやってワインを残しておくかだ。たいてい、ここまでで、もう飲み終わってしまって、グラスワインを追加でたのむ羽目になる。もし胃袋がゆるせば、あとはドルチェだが、僕にはあまり縁

がない。それよりやはりディジェスティーボ（食後酒）が魅力だった。グラッパとかサンブーカなど、僕の満杯のおなかの面倒を見てくれる。

フルーツはその前の至福の時かもしれない。さくらんぼ、オレンジ、なし、リンゴ、イチゴ、すべて姿形はわるいのだけれど味は抜群。そしてなによりもそのものの味がする。それが凄いと思う。

食事の終りはやはりエスプレッソになってしまう。そして「イル・コント、ペルファボーレ！」と食事の終わりだ。だいたい10時に近い。あとはシャワーを浴びてR A Iのテレビを見てリラックスということになる。

アパートメント

やはり早くアパートを探すことにした。ホテルの生活は自分のものにならない。人事課のポッチさんの助けを借りて、いろいろアパートを見て歩く。

歴代のリエゾンが住んだというカベッツアリ通りのアパートも見たがちょっと狭い。いろいろ選んで、結局ガロファロ通りのアパートを捜し当てた。ミラノの東北東の部分だ。オール・ファーニッシュで備品、食器、寝具、さらにクリーニング付きだ。4階建ての3階の2LDKになった。イタリアの建物はほとんどそうだが、かならずシャッターか日除けの扉が窓の外に付いている。この建物は窓の上から下まで一枚の木の折り戸が付いていてとても感じがいい。明るいと寝られない僕には必要なものだ。

ベランダからは、敷地の庭を通してアルプスの白い山並みが見える。地下には暖房付きの車庫がある。アパートの女性オーナーのフェラーリは真っ赤で、車庫に似つかわしいが、僕のフィアット850Sには、車庫のほうが立派過ぎたかもしれない。冬はヒーターが入るのだ。

このレジデンスを選んだ理由は、アスプロモンテ広場に近いということもある。ビメルカーテへのバスが出る広場まで歩いて5分くらいだ。ミラノの地元の人たちで賑わうコルソ・ブエノスアイレスへも10分くらいで行ける。それで決めた。地下鉄はピアッツア・リマだ。これで自分の生活が持てる。トラットリア・トスカーナまではちょっと遠くなった。歩いて15分はかかる。でも歩いていくことにする。

生活の基盤を得てちょっと安心。買い物はもっぱらコルソ・ブエノスアイレスだ。スーパーマーケットのスタダもエス・ルンゴもウピムもコインもすぐ近くだ。ピアッツア・リマの近くには、小さな個人商店もいっぱいある。とにかく大きな街中に、いっぱい人が生活している。大体4、5階建ての古い石造りのマンションだが、皆きれいに修理しながら何世代にもわたって住んでいる。

後で分かったことだが、ヨーロッパでは、パリでも、ロンドンでも、スツットガルトでも、どこでも、人が街のなかに住んでいる。だから東京みたいに街がさびれない。パン屋さん、肉屋さん、魚屋さん、果物屋さん、八百屋さん、電気屋さん、靴屋さん、薬屋さん、パール、ピッツェリア、とにかく生活に必要な店が皆、軒を連ねて街中にある。だから伝統も、近所付きあいも、みんな街なかにあるのだ。300年も同じ所に住んで居ると、その家族の歴史がそこにできてくる。外から見るとミラノのアパートはみんな石の古い建物だが、中はみんな冷暖房が入り、床、壁を張り替えてきれいに住んでいる。職場と住居が大接近なのだ。だから日本みたいな朝夕の殺人的なラッシュは存在しない。うらやましい生活の知恵だ。

残念ながら東京は、こんな住環境をすべてなくしてしまった。そして下町の人情も人のつながりもすべて。

レジデンス・グランサッソに住み始めて、やっと僕のミラノの生活が始まった。アパートからバスのでるアスプロモンテ広場まで朝の道を歩く。足の短い、変なミラネーゼの出勤だ。

夜中のウインド・ショッピング

ミラノはイタリアだけど、日本で想像していたイタリアとはちょっと違った。人はみんな、結構背が高く、髪の色も黒は少なく、ブロンドやブルーネットが多い。

ロンバルディアの人達はどちらかというと、オーストリア人とか、ドイツ系の人達とかなりにている。

日本で、ネオ・リアリズムの映画や何かで見て、典型的だと思っていた、髪が黒く、小柄で忙しく歩き回るイタリア人は、どちらかというと、南部の人たちのようだ。

ミラノはイタリアの中では一番経済的に発達し、その一方、文化、芸術の世界でもバランスのとれた街だった。特に凄いのは洋服、靴、バッグなどのファッションの世界では冠たるミラノだ。とにかくセンスがいい。

ミラノでは買い物といえば、ウインド・ショッピングが中心だ。人は決して簡単には物を買わない。日曜日、普通の店は開けていない。しかし人は日曜日にショッピングを楽しむ。欲しいものがあれば、いろんな店のショーウィンドを幾つも幾つも見て回って、友達とか家族とかに相談したり、一緒にみてもらったりして、品定めをするのだ。そして最終的に決めたい店で入って物を確認して、初めてそれを買うのだ。だから時間と根気が必要だ。同時に、そのプロセスを楽しんでいるようだ。

そういうわけだから、店のほうでも休みでも、日曜日のショーウィンドの飾り付けと、照明はとても大切なのだ。日本のように、閉店の時にシャッターを下ろして、ウィンドウを見えなくしてしまうのはもったいのほかだ。ミラノでは、真夜中のウインド・ショッピングの為に、鉄とか青銅のしゃれた、しかし、しっかりした格子でショーウィンドを囲みながら、煌煌と照明を点けてベトリーナの中の品定めができるようにしている。それはモンテ・ナポレオーネとか、ピアッツァ・サンバビラのようなファッションの街だけではなく、僕の住んでいたアパートに近いコルソ・ブエノスアイレスのよう一般の人達がショッピングに出かける町でもそうだ。だから店に入るといことは、心を決めてこれからあれを「買う」という目的で入ることなのだ。単なる冷やかしは、ミラノでは基本のご法度だ。

日本と違って感激したのは靴屋さんだ。靴を合わせる時は、必ず客を椅子に座らせて、店員は床にひざまずいて客の足に手を掛けて履かせてくれる。日本のように客が勝手に靴に手を触れて、自分で靴べらを手にして履いてみるなんてことは決してない。もちろんさせてもくれない。客の足に本当に合う靴の形やサイズをいろいろ変えて見ながら、店員が親切に専門家として靴を選んでくれる。さらにその靴に似合う洋服とのコーディネート相談にだって、ちゃんと乗ってくれる。だから店員さんはすごく誇りをもっている。お客もちゃんとした対応を店員さんにする。当然プロフェッショナルなサービスを受けることになる。そんなわけで、店員さんに対するお客の態度もすてきで、店への出入りのときのボンジョルノ、ブォナセーラは欠かせない。

ミラナーゼの夕方の外出

ミラノだけの現象ではないが、夕方、人がたくさん街に現れてくる。夕食の前にちょっと散歩したり、友達と会ったり、単に街に出て人々を見たり、とにかくいっぱい、いっぱい人が現れてくる。老夫婦は腕を組んでゆっくりと散歩する。若い人たちはボールに陣取ったり、ジェラテリアにたむろしたりしてお喋りに余念がない。カフェのテーブルはアペリティーボ（食前酒）を楽しむ人達でいっぱい。お互いに話したり、もっぱら前を通る人たちを、とにかく眺めて居たり、ゆっくりとした時間が流れる。それが夕食前のしきたりみたいだ。そして街の人達の交流の時間にもなっているようだ。「最近、Xサンの姿を見かけないけど、お元気かしら」「ちょっと、体を悪くされていたようだけど、もういいみたい。来週にお出かけになるんじゃないかしら」なんて会話が聞こえてきそう。

その時間が街がもっとも華やぐ時間だ。ビットリオ・エマニュエル・アーケードの中のカフェも人でいっぱいだ。背の高いエマニュエル・アーケードの中だから、天候にかかわらず、何時もオープンなテラスが人気の的だ。人々はゆっくりアペリティーボを時間をかけて楽しんでいる。そこに加わって、僕も座って、みているだけでとても楽しい。女たちは着飾って居るし、男たちもとても気障な奴もいたりして。お巡りさんだって羽の付いた特異な帽子を気障にかぶって、二人一組でその長身の姿をゆっくり運ぶ。まさに絵になっている。

その後が食事の時間だ。だからレストランは早くても7時半前には開かない。食事の時間も2時間はかかるから、普通でも家に帰るのは10時すぎというわけだ。

ドットーレ・シオリの山荘

ドットーレ・シオリの夏の山荘は、ドロミテ・ディ・ブレントアのマドンナ・ディ・カンピリオにあった。小さな木造の小屋に近い山荘だ。夏になると彼は家族をそこに先に送って、自分だけはミラノで仕事をしている。もちろん彼が休みに入れば家族と合流するのだが。

ある夏2, 3度、彼の山小屋に連れて行ってもらった。小さな保養地でミラノから2時間もあれば着いてしまう。ガルダ湖のそばを山に向かって入って行く。ドロミテ山岳地方にももちろん似ているのだが、ちょっと離れた別の山たちだ。

エミリオ・シオリとエミリアシオリ夫妻は長男フルビオを連れて、毎年この山で夏を過ごすのだ。山小屋の前の芝生には、高い白樺の木がそびえていて、それにハンモックをかけてある。澄んだ山の空気を吸って、夏を過ごすのはとてもすてきだ。そのころフルビオはまだまだ小さくて学校には上っていなかった。ちょっと甘ったれでやさしい目をした男の子だった。マドンナ・ディ・カンピリオに僕が滞在中、ずっと一緒だった。

2000メートル超えの高地だから、夏とはいえ、夜は本当に寒い。フルビオが寝てしまってから、3人でよく小さな村に夜の散歩に出かけた。星空が高く高くあって、劣らずに高い山の黒い影がぬっとそびえている。セーターとウインドブレーカーが必需品だ。夫婦で夜中に腕を組んで散歩するのを見るのは、僕にとってはちょっと新しい感じだった。

近くに滝があって、みんなでお弁当を持って、エミリオの赤いアルファ・ジューリアで出かけた。弁当といっても、とても簡単だ。サラミとチーズ、パンと赤ワインのボトル、アックア・ミネラーレとちょっとしたピクッルスですべてだ。ヴァル・ディ・ジェノヴァのナルディスの滝は、山肌を白く染めながら、高みから落ちてくる。その前の方には、広い湿原や、なだらかな草原が広がっている。夏の日の太陽が昼間は熱い。多くのパーティがやってきていて、とても華やかな昼間だ。とてもシンプルな食事、でもとても豊かな感じだ。自然が近くにあるとそれだけで空気がうまく、食事もおいしい。静かな風の音のなかに、穏やかな時間が過ぎて行く。

フルビオとはもっと驚く経験がある。5歳の子供だけれど、エミリオと僕との3人である日登山電車に乗って、その頂上駅からスピナーレ山の2100メートルの山頂まで日帰りしたのだ。もちろん、ちゃんとした山歩きの靴を履いて。こんなちっちゃな頃から、ちゃんと山登りを経験しているのは、とても恵まれたことだと思った。泣き言も言わず、ほんとうに元気に大人顔負けで歩き通した。立派だった。もちろん甘えん坊だから、家に帰り着いてマンマに甘えて涙しながら、「ぼく、つらかったよ」と山歩きを話していた。とてもかわいかった。先日会ったらもう結婚していて、でもあどけなさが残っていてフルビオだと分かった。

冬は霧に閉じ込められるミラノだけれど、ミラナーゼはこうした山小屋みたいな別荘を、大都会からの逃避のための素晴らしい場所を持っているのだ。うらやましい。ドットーレ・シオリが特別な階層の人ではなくて、普通のサラリーマンなのだ。

スイスに太陽を求めて

ミラノの冬はとても寒く、そして暗い。ポー河の霧と、時としてくる雪のせいだ。

こんな時にはアルプスの向こうに、太陽を拝みにでかける。不思議なことに、いくらミラノが霧にとじこめられていても、スイスの山の向こう側は晴れなのだ。惜しげもなく太陽がふりそそいでいるのだ。

イタリア側のドモドッソラから、シンプロン・トンネルを通過して、スイスのカンデルスタッグまで、車が貨物列車の上に乗ってアルプスを越える。車専用の無蓋貨車にどんどん車に乗って、簡単にストッパーを掛けていく。車の乗員はそのまま車のなかにいる。すると車は、ジェットコースターに乗っているかのように、鉄道の狭い線路の幅をガタガタ揺れながら猛スピードで走る。カーブでも、ブレーキを踏んでスピードを緩めるわけにはいかない。ドライバーはすべてを列車に任せて乗っているしかない。電車がトンネルに入るとまさに暗闇を光もなく自分の車が突進していく。足が何回もブレーキにいく、無駄なことと知りながら。

トンネルを過ぎて、ツェルマットへの入口、ブリガを越えて谷を越えて、崖っ淵を電車は車に乗せて急な渓谷をのぼっていく。カンデルスタッグに近づくと、スイス・アルプスの山々が明るく晴れた空を見せて高く高く聳えている。そこで列車から降りると、やっと車は自分でスイスの道を走り始める。なかなか日本では得られない体験だ。

本当に不思議な気がするのだけれど、いつも冬のスイスは陽の光が射している。霧のミラノから逃げ出して見ると、明るい陽射しが待っていてくれるのは本当に嬉しい。スイスの首都、ベルンはとても素敵な小さい町だ。熊が彼らの愛する動物だ。清らかな小さな流れによりそう静かな町、これがベルナー・オーバーランドへの入り口だ。インターラーケン「湖の間」という意味だ。ツーン湖とブリエンツ湖の岸を走って、ここインターラーケンに入る。最高のスイス・アルプスを楽しむ道への入り口だ。

カラフルな登山電車がグリンデルバルトまでの急峻なレールを上っていく。ゆっくりゆっくり、アルプスの山並みを見せながら登っていく。冬はまさにスキーの世界だ。夏の牧場は一面雪で、どこでもがスキーの世界になる。登りつめたグリンデルバルトはアイガー北壁の目の前。直立した壁面が目の前にある。朝日が壁の氷を照らす。凄いの一語だ。

スイスはほんとうに綺麗な国だ。それは風景もそうだが、人へのもてなしもそうだ。僕が始めてグリンデルバルトに到着した時は、ハイ・シーズンにも拘らず僕は予約なしだった。ホテルはみんな一杯。困った。しかし、アイガーが目の前にせまる、有名なホテル、レジーナは、僕のために夏だけ開けているホテルのシャレーを特別に提供してくれた。シャレーといってもちゃんと冷暖房は入っていて、僕はたった一人で全体を占有して、王様気分だ。勿論ホテルの設備はすべて使える。すばらしいアイガーの岩壁をのぞむレストランも、ディスコも、バーもすべて。幸いにしてチューリッヒからの姉妹に、ダンスのお相手、お酒のお相手が許されて、素晴らしい思い出のグリンデルバルトの夜となった。

特に朝食は素晴らしい。目の前の岸壁を見ながらコーヒーを楽しむ。光に輝く氷のキレットを目の当たりにしての時間は、とても日本では得難い体験だ。アツクするクライマーの姿を備え付けの双眼鏡でのぞくこともできる。

ここで登山電車を乗り換えて、さらに高みへと登っていく。クライネシャイデックまで、ほとんど垂直に近い感じで登っていく。アイガーの横手になるクライネシャイデックは「小さな肩」という意味だ。ユンクフラオが若い女性、乙女という訳だから、クライネシャイデックはちゃんと意味をなしているのだ。

反対側の、ラウテンブルンネンからも電車が着く。ここで乗り換えてユンクフラウ・ヨッホまで登っていく。ここから、ユンクフラウの氷河を上から見るテラスに出る。3450メートルは日本では体験できない高さだ。「走らないで下さい」と書かれた看板がたっている。酸素が薄いのだ。ゆっ

くりゆっくりと自分に言いながら歩く。氷のトンネルをぬけると、足元に急峻な深い谷の底に氷河が見える。瞬間的に天候が変わる。今見えた谷が厚い霧に覆われて、まったく何も見えなくなってしまう。氷河を削った、僕たちが歩くトンネルは氷を透過した光で、特別な光景に見える。つまらないことが、僕を現実に戻す。残念ながら日本人の落書きが目立つのだ。なぜこんな特別な場所にまで、つまらない落書きをするのか、その神経が分からない。目を伏せて取り過ぎるしかない。

クライネシャイデックから、ベンゲン経由ラウテンブルンネンまでは、まさに「アルプスのハイジ」の世界だ。メンヒ、アイガーそしてユンクフラウの山並みが正面に聳え、がたがた降りて行く登山電車の窓を一面に埋め尽くす。何度このルートを降りても、いつも窓に釘づけになってしまう。ミュウレンの高みが見えてくると、そこはもうラウテンブルンネンだ。ミュウレンの山からの滝が印象的だ。

いつだったか、クライネ・シャイデックで雪合戦をした覚えがある。おそらく天候の加減でユンクフラウ・ヨッホまで登れなかった日の記憶だろう。またグリンデルバルトのレストランで素朴なスイス料理を味わったことも記憶にある。おそらくフィルストへ登った日のことだろう。牛たちがガラガラとカウベルを鳴らしていた。こんな素晴らしい旅が、ミラノの冬の霧を忘れさせてくれる。消しがたい、そして印象深いグリンデルバルトだ。

マッターホルンとチェルビーノ

トリノの先を、さらにフランスに向かっていくとバレ・デ・アオスタの地方だ。

マッターホルンと呼ばれる山へ迫る南側の谷の道に行く。イタリアではマッターホルンをチェルビーノと呼ぶ。凄く急な谷間の道を、いく度となく急カーブを切って登っていく。その行き止まり、チェルビーニア村は、その昔、ノンストップ・ランセで有名な、スキー場でもある。ノンストップ・ランセは、オリンピックの大滑降の元祖と言われている、直滑降でとにかくスピードのみを競う、危険な競技だ。チェルビーニア村は、真夏でもスキーができる。僕がいった4月は、まだスキーシーズンと言うわけで、ホテルはスキー客で一杯。でもロッジに予約なしで部屋が取れた。荷物もそのままにして歩けるところまで登ってみる。谷あいをゆっくり登っていくと、だんだん視界が開けてチェルビーノが目の前に現れた。

チェルビーノの山頂はちょっと雲がかかっている。素晴らしい世界で声もでない。こんな時ほど話し相手が欲しい時はない。一人で旅をすると、時々急に仲間が欲しくなる。感動を分かち合って、同じ時間を過ごす楽しさの欠乏症だ。一人では時間を構造化できない焦れったさを味わう。

ゴンドラがプラトウ・ロウザまでの長いスロープを上って行く。足元にはもう春の息吹が一杯。北からの、プラトウ・ロウザへの谷は、スイスのツェルマットからの谷で、最終的には、マッターホルンを眺める同じ場所につながっている。要は、北から見れば、マッターホルン、南から登れば、チェルビーノなのだ。ここには、広いテラスが造られていて、スキー客もトレッキング客も、皆寝そべて日光浴をしている。片手にビールを持って、サングラスをしてゆったりと時間を過ごしている。モンブラン、モンテ・ローザ、そしてマッターホルンが目の前だ。北にはスイス・アルプスが光って見える。

僕もここで、ビールとフランクフルトの軽い食事を取る。とても日本では、こんな楽しみ方できない。ゆっくりとした時間を、こんな高い山の上で過ごせるなんて。ここには北のツェルマットから入った人達も一緒だから、聞き慣れたイタリア語とかフランス語に混じって大きな声のドイツ語が聞こえる。この高みは本当にインターナショナルだ。そういえば、いつもドイツ語は大きな声で聞こえるのは気のせいだろうか。

晴れたアルプスの空は限りなく、見上げる目に高い。日本で北アルプスとか、後立山連峰を歩いたことがあるが、こんなに簡単に高みには辿りつけない。スキーを履いてくるのがよかったのだろうけれど、支度はない。ゆったりとした時間の後で、ゴンドラに乗って降りるしかない。足元を山スキーの人たちが降りていく。アオスタの深い谷が足元からずっと遠くまで続いている。ごっつんとゴンドラが揺れて麓に着いた。

夕方になると霧が出て来る。夜、ホテルは賑やかになる。ディスコが音楽をやっている。人々がアフター・スキーを楽しんでいる。一人の旅人は、一人で静かにアルコールを傾ける。暖炉には火が燃えている。部屋の窓からは谷間のロッジの灯が暖かな色で揺らめいているのが見える。外に出て見ると、高い高い空の向こうに、チェルビーノが黒く聳えて見える。

あすは山に向かう牧草地をゆっくり歩いてみようと考えた。まだ牛たちはいないはずだ。谷川の清冽な流れに手を浸してみようと思う。春の高山植物たちがその芽を見せ始めているかもしれない。

ミラノの生活では考えられない、濃密な静けさが降りてくる。これでミラノのざわついた夜の時間を忘れ去って、深い眠りにつけるに違いない。

ミラネーゼ・ナンバー「MI」

ミラネーゼ・ナンバー「MI」

スイスのサンモリッツでの思い出はたくさんある。一番印象的なのは、僕がフィアット850でサンモリッツまで最初にでかけた時だ。その頃のフィアットの車は、一般的にフィアット145とか、もっと大きいモデル以外はほとんどRR（リア・エンジン、リア・ドライブ）で、僕の850（オットチェントチンクワンタ）もそうだった。ハイギアードで、平地ではスピードが出るが、山道の登りでは青息吐息だ。

今と違ってミラノからサンモリッツまで高速道路もなく、コモ湖の湖畔を200キロほど北に登っていく、古い曲りくねった道だった。ミラノのフィアット販売の人が、イタリア語の分らない僕に、それこそ手取り足取りで、850の操作を教えてくれた。どうにか一人で、850をちゃんと動かせるようになって、初めてサンモリッツに向かってコモ湖畔に登っていった。中世からの古い石畳の街道をひとりで辿った。

夕暮れになって、サンモリッツに着いて道を間違えた。方向転換をしようと、ギヤをバックにいれようとしてギヤチェンジを試みても、どうしてもバックに入らない。ミラノで教えてもらった通りにやったつもりなのだが、どうしてもバックができない。あせった。しかたなくそこに車を置いて、歩いて車関連の店を探す。かなり降りていて、店を見つけた。必死に、身振りで助けを求め、店の人と一緒に車に戻った。

彼は簡単にバックにいれた。見習って僕もやってみるけど、やっぱりは入らない。もう一度彼はゆっくりやってみせてくれた。よく見ていると、ギヤ・チェンジレバーを動かす前に、レバーをちょっと真下に押し込んでいる。それが秘密だった。冷や汗が流れ出した。もう夕暮がちかづいていた。路肩には、まだ深い雪が残っていた。サンモリッツに着いてからでよかった。急な上り坂の途中だったら、と考えるとぞっとした。彼は手をふってスタンドへ帰っていった。ギヤを押し入れるなんて簡単なことだけど、分かっていないととても思いつかない。やっと宿に着いた。ほっとした気持ちで一杯だった。

その春、やはりスキーでサンモリッツにいった。ホテルの駐車場が一杯で、外の駐車場に入れた。翌朝、凍てついた寒さの中、駐車場でエンジンをかけようとしてセルを回した。けれどエンジンはかからない。白い煙がポツポツとでるだけだ。あせった。僕の車はミラノ登録だから、ナンバー・プレートは「MI」だ。ミラノの車だってことはすぐ分かる。足の短い東洋人がフィアットと格闘しているのをみて、沢山の視線が集まる。駐車場は除雪が完全ではなく、車の周りは積み上げられた雪に囲まれている。足をとられながら、出たり入ったり、エンジンルームを開けたりだ。バスの運転手さんたちが、見るに見かねて集まってきて、僕を助けてくれる。しかしエンジンは冷え込んでかからない。なかの一人が自分のバスから、スプレーを持ってきてくれた。キャブレターに突っ込んでエンジンを回すと火が入った。やったー！！エンジンが回ってうれしくて、そして、親切がうれしくて涙が出そうになった。

その運転手さんたちのバスはイタリアからのバスだった。イタリア人はとても同郷の人に親切だ。彼は僕のナンバープレートの「MI」をみて、ミラノからの変な東洋人だと分ったのだ。イタリア人にとっての外国、スイスで、僕はイタリア人に同胞として親切にしてもらったのだ、日本人の僕がミラネーゼとして。彼はそのスプレーを持っていけとって僕にくれた。僕は何度もお礼を言って出発した。

もう一度はもっと深刻だった。その夏休みに、スイス・オーストリア・ドイツを3週間ばかり旅行した帰り道、オーストリア・スイス国境のオーストリア最後の町の手前で、僕の不注意が元で、軽い事故になってしまった。片道2車線の道路が急に1車線になっていて、ブレーキが間に合わず、僕が前の車の右側をかすって土手に乗り上げて止まった。僕の車は左のフェンダーが凹んだ。前の車はお尻が5センチ四方ぐらい擦り傷になってしまった。

相手はドイツ人だった。車はまだ300キロしか走っていないぴっかぴかの新車。しかも高級車。NSU・バンケル（今のアウディ）のロータリー・エンジン車。世界初めてのロータリー車で、とっても有名で高価な車だった。相手が悪かった。僕は自分の非を認めて、英語で一生懸命謝ったが、相手は全く分かってくれない。こんな時にはカルタ・ベルデ（国際保険）にサインすれば、後は保険屋が全部してくれることに

なっている。必要なのは、僕のサインと警察官の確認サインだけで、現場検証する必要もない。しかし言葉も通じず、彼は現場から離れることを拒否してその場を動こうとはしない。夏休みで交通量は多い。たちまち両方向とも大渋滞。バスや車の窓からいろんな顔が出て、我々を見て迷惑顔。大した事故でもないから余計に不審顔。

ここでまたまた「MI」ナンバー・プレートの御利益。何台ものイタリアのバスから運転手さんが降りてきて、状況を見て僕の代わりにドイツ人にドイツ語で話してくれた。またしてもミラノ登録のプレートをみて、イタリアの運転手さんが、困っている変なミラネーゼを助けてくれたのだ。この間、一時間弱、怒りくっていたドイツのおじさんは渋々了解。やっとのことで車を動かすことができた。

渋滞した車が動き出すと、バスの窓から皆が拍手。いろんな人たちが手を振って車が動き出したことを祝ってくれた。助かった！感激で目がくしゃくしゃになった。
オーストリアで、ドイツ人と日本人が事故を起こし、それをイタリア人が僕を同郷の者として助けてくれたのだ。僕がミラノにすんで、ミラノ登録の車に乗っていたというだけで。「ミラネーゼに乾杯！」である。

そしてスイス・オーストリア国境を越えた最初の町がサンモリッツだった。

愉快的な友達、スキー狂のサンモリッツ

愉快的な友達、スキー狂のサンモリッツ

ミラノでの生活に時々アクセントをつけてくれるのが日本からの友達だ。いろいろ愉快的な、時には本当に内緒の話がいっぱいある。

Kは本当にスキーが好きで、もちろん腕前も大変な人物だ。彼は僕が日本を出るときから、絶対にスイスにスキーをやりに行くから、サンモリッツへ連れてってくれと言っていた。その彼がいろいろ頑張った理由を作って、ヨーロッパにやってきた。パリでの会議を中心に1週間ばかりの短い出張を無理やり作って、ヨーロッパにやってきた。その忙しい中、2泊3日のサンモリッツでスキーをやった。

このスキーのために、彼は日本から重くてでかい自分のスキー靴を持参した。板はレンタルで良いが、靴だけは自分のものでないとだめだというわけで、えんやこらしよと飛行機に乗って持ってきた。それだけでも頭が下がる。

冬のサンモリッツはスキー客でにぎわっていた。ミラノから山の中へ3時間の旅だった。ホテルはサンモリッツの丘の中心にあるステファニにとった。登山電車の駅のすぐ側だ。僕のスキーはまだ中級で、シュテム・クリスチャニアができるぐらいだった。彼はその僕も一緒にピッツ・ネールからダウンヒルをやりたいと言う。板は彼はクナイスル、僕は小谷坂を借りた。その頃には日本スキーはもうヨーロッパまで出てきていて、サンモリッツで日本の板を履くとは思ってもみなかった。幸い天気はくて、3400メートル越えのピッツ・ネールにゴンドラが着いた頃は太陽が強く照っていた。最初からアルプスの青氷の上をトラバースすることになる。カリカリのバーンの上を斜滑降で進む。足元を見るとずうーと下まで氷の斜面だ。足がすくむ。なんとか雪の斜面に出て滑降が始まる。ダウンヒルは本当に快適だ。日本と違って人は少なくぶつかる心配もない。長いコースを下っていると耳元に風が立ってスピードを感じさせてくれる。とにかく下りはどちらにしても快適でスキーの醍醐味だ。長いコースで足が疲れるが、しかし楽しい。

問題は登りだった。長いダウンヒルのコースは尾根から長い斜面を滑って下り、谷に着いて、そこから次の尾根にのぼって、また一段下の谷まで降りて行く、その繰り返しだ。登りは、その頃のスイスではほとんどがTバー・リフトで、日本では余り馴染みがなかった。それはロープトウのようなもので、ロープにTの字型の股に挟む木のバーが付いていて、それに尻を乗せて足は雪面を板で滑りながら斜面を登っていくのだ。慣れていないので、バーを股にはさんで足で踏ん張るタイミングがなかなか取れない。ショックがきて、どうと転げてなかなか上手く乗れない。なんとか上手く捕らえてもそれでOKとはいかない。登りがけっこう長い。そして登っていく雪の面は決してなだらかではなく、ギャップやコブがあったりする。そんなところを、足をふんばってバランスをとりながら、自分のスキーを滑らせながら登るのだ。下手をすると、途中でバランスを失ってロープトウから放り出されてしまう。そうすると、もう一度、谷の底の出発点まで降りて行って、スタート地点でロープを掴むしかない。ゲレンデとしては整備されていない新雪の雪面を、やっとの思いでスタートまで下って戻ってやり直しだ。

彼は慣れていて失敗はない。ロープトウの上で、僕が奮闘しながら上がって来るのを待つしかない。時間がどんどん経っていった。僕の疲れもどんどん増してきた。何回登って降りたか分からないぐらいになって、やっとサンモリッツの湖が見える斜面に出た。ほっとしながら緩やかな下りを楽しむ余裕が出てきた。彼は自由自在に楽しんで居たが、ある時、彼は体を宙で回転させながらある崖を飛んだまま見えなくなった。足元はかなり急な崖で、覗いて見ても上からは彼がどうなったか見えない。

サンモリッツのスキー場にはセイフ・ガードがいて、僕がまごまごしていたために僕たちがその日のダウンヒルグループの最後尾になっていた。ガードはすべてのスキーヤーを3時までには麓に安全に確実に下ろす役割を持っていた。だから我々のすぐ後を確認しながら下ってきていた。これが幸いだった。僕は彼等に助けを求めた。Kをすぐ探してくれるようにと。彼の消えた崖の上から、さらにその下の斜面を彼らは探してくれた。すごく長い時間のように思えた。足を折ったり頭を打ったりして怪我をしていたらどうしようとか、自分とはとにかく早く安全に降りることなどと考えながら滑った。幾つかのカーブを曲がってかなり下の斜面に雪だらけになって立っている彼のめんどろを、ガードが見てくれているのを発見した。本当に安堵の疲れが出た。幸い彼は大した怪我もなく、ちょっとした擦り傷だけですんだ。彼は舌を出して失敗しちゃっ

たと言って笑った。ガードは神妙な顔をしていたが、やっとなら笑った。良かった。あまりにも上手いと逆にそれで危ないこともあるのだと知った。

降りたときはもう夕闇が迫っていた。その夜のビールは本当に美味かった。
次の日、僕たちは2泊3日のサンモリッツでのスキーをおえてミラノに帰った。
彼はその翌日、ヨーロッパを離れて日本に帰っていった。出発ロビーで、今度の事は会社には内緒だよとKは言った。僕は分かってるよと答えた。それから日本に帰ってからも、ずっと僕たちは秘密を共有する仲のいい友達だ。スキーのためにヨーロッパ出張を作ってしまった人を、あまりほかに知らない。

愉快的な友達たちのカメラ

愉快的な友達たちのカメラ

〇とTが、ドイツ出張の帰りにミラノに2、3日滞在した。彼らは、凸凹コンビで、小太りの〇さんと、瘦せの背のひょろりとしたTさんがひとつのチームで仕事をしていた。二人ともとても愉快的な仲間たちで、彼等の訪問は楽しかった。

実は、彼等は大変な望みを持ってミラノに来ていた。かみさん達には絶対に聞かせられない話だ。とにかくミラノに滞在中に、イタリア女性と、何としても親密になりたいという、大変な望みを日本から持っていた。ミラノに滞在している僕に、どうしても一肌脱げという。仲のいい二人の希望を、僕は無下に断ることはできない。そこで幾つかの重要な情報と、注意事項を教えた。場所はピアッツアP。必ずパスポートを持っていくこと。現金を持っていくこと。どの辺に立っている女性に声をかけるかとか。簡単な地図まで描いてあげた。安全の準備は彼等が準備していた。その夜二人はがんばって出かけた。

翌朝、バールでエスプレッソを飲みながら、昨日はどうだったと聞くと、ちょっと残念な様子だ。何故かを聞くと、その種の女性とうまく遭遇して話すことができたのだけれど、今一歩うまくいかなかったというのだ。だから昨夜は目的を達してくることはできなかったという。ちょっとしょんぼりしている。

Tが話のなかで、日本のカメラと日本人のカメラ好きは、イタリア人に本当によく知られているのだな、と言う。昨日は夜だったから、カメラは持っていかなかったのが敗因だったと嘆いている。

話を聞いて見ると、好みタイプの女性に出会って、彼女たちと英語で金の話しをして、合意が成り立った。ところが、彼女達に、「カメラを持っているか」と聞かれたというのだ。その時、カメラはホテルの部屋に置いてきたから「No Camera」、「No Camera!」と言ったら、そこで話が終わってしまって、交渉不成立だったという。カメラさえ持って行ったら、きつとうまくいったのになあ、ととても残念そうだ。

僕は吹き出してしまった。「カメラ」と彼女たちがいったのは、男と女が仲良くなるための「部屋」はどうするか、と聞いたのだ。イタリア語で「カメラ」と言うのは部屋という意味なのだ。つまり、彼女は、どこで仲良くなるのかと聞いたのに、彼らは、写真機は持ってきていないと言うつもりで、「部屋なし」と言ったものだから、彼女たちは早々に話しを打ち切ったのだ。季節は10月だったから、外はもう寒かった。ここまで話したら、今度は彼らが猛烈に吹き出した。写真機はイタリア語で「Macchina Fotografica」というのだ。

その日がミラノ最後の夜だということで、二人はその夜、思い出を作るべく、また出かけていった。写真機を持っていったかどうかは聞いていない。

リナーテ空港で見送ったとき、二人は片目をつぶってみせた。ハッピーなミラノの思い出ができたようだった。

これには後日談がある。日本に帰ってからも、武士の約束で、そのことは内緒にして〇とTと僕は、仲の良い友達関係がつづいた。何年も経って、ある酒の席で面白い話を披露する場に出くわした。ある人が、イタリアでの日本人の「カメラ」の話を持ち出した。それはまさに、部屋と写真機を間違えた例の話だった。

それを聞いて僕は驚いた。それは、僕がずっと内緒にしてきた、僕の立ち会った、あのカメラの話だった。僕は全く話していないから、その話が流れ出たのは、きっと張本人たちからに違いない。当事者も黙っていられないくらい愉快的な話だったのだ。笑い話に著作権はないのだけれど、この話の立会い人、その本人、当事者だと言うことで、リアルに話をしておいた。僕の立会い人としてのプライドが許さなかった。

その後も、この正調「カメラ」の話を、世界中で権威を持って喧伝したのは言うまでもない。この話はアメリカ人にも、オーストラリア人にも、スペイン人にも大笑いのネタとして有効であったことを付け足しておく。

国外退去、ジンデルフィンゲンへ

国外退去、ジンデルフィンゲンへ

南ドイツ、シュトゥットガルトのすぐ西に、ジンデルフィンゲンと言う小さな町があるのをご存じだろうか。もしかするとダイムラー社のジンデルフィンゲン工場で知られているかもしれない。なにしろ有名なメルセデス・ベンツの生産拠点だから。

僕はこの町に1ヶ月間、イタリアのミラノから緊急避難して住んだことがある。それは素晴らしい八月の一ヶ月でもあった。

事の起こりは、僕のミラノでの滞在許可を3回目に更新するときだった。I社の人事担当の人が、僕といっしょにミラノのクエストゥーラ（滞在許可を出す内務省の役所・警察）に行って、僕の仕事を話を話した時に起こった。僕がミラノのI社にデスクを持って働いていると言ったら、その役人は、「それは労働だ！労働許可が必要だ！今まで6ヶ月もそれなしで働いていたのか」と大騒ぎになった。給料はいくら日本からきているとか、今までの先輩達もそうだったとか説明しても、頑として受け付けない。結果としては48時間以内にイタリアから国外退去という処分になってしまった。僕たちは大慌てでI社に帰って対策を考えた。I社は国際的なネットワークがあって、早速ドイツの人事部に紹介してくれた。そしてすぐさまジンデルフィンゲンに一時的に移ることになった。

すべてのものをそのままにして、国際的に逃避行、なんて考えもしていなかったが、とにかくそんな風にして僕は南ドイツの田舎町に暮らすことになった。その間に、会社では正式にミラノ滞在許可をとる手続きを開始してくれた。なんだか、どこか夏休み気分でもあった。でもちゃんと毎日ジンデルフィンゲンに出勤した。仕事のかなりのことはドイツからでもできた。

ジンデルフィンゲンの朝は早い。6時30分には出勤だ。その課が特別早いわけではなく、だいたい30分位のずれはあるものの、みんなの出勤時間がとてつもなく早いのだ。そのかわり太陽がまだピーカンの夕方4時には会社は終わりだ。天気の良い日なんかは、朝、家を出るころはまだ薄暗い感じだった。I社の正面にあるダイムラーの工場から、早朝の暗闇の中を黒いメルセデスを背中にいっぱい乗せた、長い長い車両運搬用の列車がゆっくりゆっくり、ゴトンゴトンと出て行くのに出くわしたものだ。

朝早いからみんな朝食を家でとっては来ない。朝8時過ぎには全社的に朝食の時間がある。マルツァイトだ。席で食べる人もいればカフェテリアまで出かける人もいる。もちろん昼飯とはちがって比較的簡単なものが多い。トーストと、ちょっとしたハムとか果物とか、それにコーヒーだ。でも、それでやっと心地がしてくる。I社でも、朝の食事の制度があるのはドイツだけだと思う。まったくびっくりした。働き者のドイツ人らしいといえば、そのとおりともいえる。

朝飯を終えてオフィスに戻ると、ここにちゃんとしたしきたりが待っている。朝の挨拶だ。朝の挨拶にも習慣がある。このドイツの会社では、課長さんは毎日、出勤してきた全ての課員と握手をして、こんにちはヘッラーA、フロイラインB、てことになる。そしてご機嫌はいかがですか、終末はいかがお過ごしでしたかとか、簡単な挨拶が続く。スキンシップと元気の確認を物理的にやっているのだ。しかも全員との握手が終わるのをみんなが立って見守っている。これには口があぐりだった。でも良く考えると、とてもいい習慣だと思った。全員との握手が終わるとやっと本格的な個人ベースの仕事にはいって行く。課長さんは毎日大変だなと思った。

昼間に会社のカフェテリアでアルコールが飲めるのは、フランス、イタリア、スペイン、そしてこのドイツだ。ドイツではビールは大きなジョッキでサービスしていた。僕はイタリアとフランスを知っているからびっくりはしないが、アメリカ人はそれを目にしてびっくりしていた。所変われば、だ。

イタリー人も人なっこのいが、ドイツ人も日本人だとわかると急に親しくしてくる。冗談で、前の大戦はイタリアを巻き込んだから失敗した。今度はドイツと日本だけでやろうよ、なんて言うてくる。苦笑いするしかない。これは何も会社の中だけではない。シュトゥットガルトに遊びに出かけたときに、大きなビアホールに入った。みんな少しビールが入って酔っ払ってくると、たくさ

んの見ず知らずの人が僕にビールをおごってくれる。「ヤパーニツェ！」と言ってニコニコ近づいてくる人が結構いるのだ。僕はドイツ語はさっぱりだから、こちらもニコニコしているしかない。

ドイツではソーセージとビールが本当にうまい。でも僕にとって、極めつけはアイスヴァインとサワークラウトだ。大きな豚のもも肉をワインに漬け込んで、そしてスパイスで煮込んである。これに良く冷えたリースリンクかなんかがあれば幸せだ。柔らかいピンク色のもも肉を切り取って、マスタードでちょっとアクセントをつけて、サワークラウトといっしょに口に運ぶ。けっこう酸っぱいサワークラウトも、この組み合わせで食べると僕にもちょうどいい。ここで味をしめた僕はその後、日本に帰ってもアメリカでもこのアイスヴァインを試しているが、あまり期待に反したことはないようだ。

ジンデルフィンゲンには毎日小さな朝市がたつ。近郷の農家の人たちが、新鮮な野菜とか果物、花などを持って集まってくる。安くて新鮮。また顔なじみになると、おまけもある。人懐こい元気な顔がいっぱいだ。僕の暮らした小さなアパートのすぐ側で、懐かしい小さなざわめきが近くにあった。

実はこのジンデルフィンゲンへの緊急避難の間、こっそり一日ミラノに帰った。国際会議で、どうしてもミラノにいる必要があったのだ。シュトゥットガルトからリナーテまではほんのひとっ飛び。パスポート・コントロールで、僕は止められなかった。夜ミラノのアパートにも泊まった。ちょっと怖かった。翌朝、すっとんでドイツに帰った。早く手続きが終わることを祈った。

夏のジンデルフィンゲンでのいい思い出の一つはフライバートだ。町の近くの公園にプールがいくつも作ってあった。子供用の浅いものから、高飛び込みもできそうな深いものから、競泳用の立派なものまでたくさんある。しかも回りは全て芝生でゆったり作ってある。芝生の中を小川が流れていて鴨たちが住んでいる。あたりは大きな森。大きなパラソルやテントを持ってきて、みんな食事持参で一日家族でのんびり過ごす。ドイツ南部と言っても冬は太陽が少ない。真夏の日々を肌に太陽をうんと浴びて冬に備えるようだ。だから芝生にごろごろ人が転がっている。胸をはだけた女性もいる。ちょっと困ったなということにもなる。

このジンデルフィンゲンに短期で来ていた日本の人がいた。この人にもお世話になった。車で近くの町や村を案内してもらった。チュービンゲンやドイツ最後の皇帝ヴィルヘルム四世が築いた、平野からにゅっと立ち上がった高い山の上のホーエンツォーレルン城などを見た。そのとき彼の車で奇妙な経験をした。時々ウィンド・ウオッシャー液が出てワイパーが動く。ガラスは曇っていないのになと思ってるとまた始まる。ギヤをチェンジする際、ちょっともたついている時にその現象が出る。原因はわかった。彼はちょっと小柄で、言っただけで足が短い。シフトするとき十分クラッチに足が届かず、その手前にある足踏みのワイパースイッチを足で稼働させていたのだ。悪いけど笑った。彼は屈託ない笑いを浮かべながら、何もなかったかのように車を走らせていた。きっとオペルだったと思うけど、そんな車が昔はあったのだ。でもおかげでのどかな南ドイツの美しい町や村を巡った。窓やベランダに花があふれていた。

そんなこんな夏の夏が過ぎて、やっとミラノの滞在許可が下りることになったと知らせが入った。僕はミラノに飛んで帰った。直接ミラノのクエストウーラに出向くことはできない。何しろ僕は国外にいて、イタリアの外で滞在許可をもらって入国することに公式的にはなっているのだから。僕はスイスのルガーノにあるイタリア領事館に、わざわざミラノから車を飛ばして出向いた。念願のちゃんとした滞在許可証を手に入れて、ようやく堂々とイタリアに入国した。

突然の出来事でなかなか経験できない体験をした。しかしそれは僕にとって、どちらかと言うと楽しいドイツ滞在を与えてくれた思いで深いものだった。もちろん、ジンデルフィンゲンにも新しい友達がたくさんできた。

ミラノからのスコットランド出張

ミラノからのスコットランド出張

僕がスコットランドに初めて行ったのは、2月というとんでもない時期だった。なにしろ緯度的に言うと、モスクワよりもっと北ということだから、感覚的にはとても冬に行くような場所ではない。

ミラノ駐在員の僕は「向こうで問題がおきているので、ちょっとスコットランドに出張して解決してくれないか」と日本から依頼されて軽い気持ちで出掛けた。グラスゴー空港に飛行機が着いたのは、とっても寒い夕暮れだった。ロンドン・ヒースローから1時間のフライトだった。

なにしろ英語の国だからと、たかを括って下り立った。ところが空港で人々が話している英語が耳に入ってこない。僕が話すのは皆わかってくれるのだが、僕には彼らの言うことがなかなかわからない。つんぼになったみたいだ。「ちょっと待ってよ」という感じになった。

会社のスコットランドの事業所は、グラスゴーからちょっと離れたグリーンロックというところにある。その日は会社には行かず指定のホテルに入ることになる。タクシーはロンドンと同じような古い形の車だ。運転手に行き先をいうのだが、残念ながら相手のいっている事がまるで分からない。彼はいろいろ教えてくれているのだが、なんだか狐につままれたような感じで心許ない。道は右手に入り江を見て細い道を進む。いくつもの古い造船所が赤錆して朽ち果てている。どうも日本の造船にやられたのだと運転手がいっているようだ。ポート・グラスゴーをすぎてグーロックのホテルに入る。

冬でも太陽の日が沈むのはとても遅い。食事を済ませて近くを散歩することにした。ローン・ボーリングをやっているクラブが近くにあって、日本でもイタリアでもみたことのない、ボーリングのレーンが美しい本物の芝生で何レーンもつくられていて、若い人もお年寄りも楽しげにゲームをしている。木製の磨き上げられた艶やかな球がゆっくりと芝生を転がっていくのを見ていると、時間がとてもゆっくり過ぎていく気がする。フェンスにもたれて1時間以上もみていたようだ。

スコットランドがまだ造船で華やかな頃を忍ばせる町並みがあった。ちょっとした高台に出ると、玄関ホールが地面よりちょっと高くなった一階にあって、そして半地下のある2階建ての建物が続く。見ると1700年代の建物だ。大抵2軒続きの作りになっていて、イギリスには付き物のバックヤードがもちろん裏にある。手入れも良くされて居て、古くても立派に使われている。建てられた年が各々建物の軒に書かれている。社会資本が本当に蓄積されていることを実感する。前のテラスは手入れが行き届いている。さすがに9時になると薄明りになって夜になってくる。ホテルの人が夏はゴルフが夜8時過ぎまでは十分できると言うから驚きだ。

翌朝、会社の人達は皆普通の英語を話すに違いないと思って、迎えにやってきたタクシーで会社についた。ところが出てくる人の言っていることが、ほとんどが分からない。困った。これがスコットランド訛だと知って啞然となった。僕には彼らの言っていることが分からない。たまげた。仕事にならない。子音が喉に詰まったような発音で、耳をいかに働かしてもチンプンカンプンだ。僕のいっていることは、ちゃんと分かってくれているので、よけいに変だ。なんとかしてよと思っていたら、分かる英語が突然聞こえてきた。彼はイングランドからの人で、彼は僕が分かる英語を話している。助かったと思った。しかし残念、彼は僕のコンタクトポイントではなく、となりの課の課長さんだ。後で話して分かったことだが、イングランドからの彼でも、慣れるまでちょっと手こずったという。これからの3週間の間どうなるのかと暗澹たる思いに沈んだ。仕方ない。どうしても分からない言葉は書いてもらうことにした。早くもミラノに帰りたくなってしまった。

夕方、会社の車が僕を3週間滞在するホテルに連れていってくれることになった。会社の運転手さんが、黒塗りのハイヤーを運転して毎日僕を送り迎えしてくれるという。1社のどんな国でも、そんなことは想像できない事だった。もちろん真冬のさなかに見知らぬスコットランドをレンタカーで通勤するなんてことは、ちょっとやりたくなかったので本当はとても助かった。この運転手さんは気をつかって一生懸命僕が分かる言葉をしゃべってくれる。こうした送迎に慣れているようでもある。冬のこの辺りは天候がとても変わりやすいという。「きっとこの1、2週間の間に冬、春、夏、秋の四

季が体験できるでしょう」と言う。緯度的には、北極に近いのだが、大西洋から比較的暖かい海流が流れてきている。だから真冬でも海は凍り付かないのだと言う。夕方の細い道には黒氷が所々張っている。この上で不注意にブレーキをかけたら、車はすっとなでしまう、といわれるとちょっと怖い。

ホテルに着いた。海辺に向かって立つ重厚な石造りの二階建ての館だ。芝生の庭の先はすぐ浜になっている。マリン・カーリング・ホール・ホテルといった。場所はラクスだ。客は少ない。なにしろ真冬で、しかも冬の観光になるものは何にもない場所だ。薄暗いロビーで、大きな暖炉が一日中、ときにはパチパチと、時にはゴウゴウと燃えている。人々は静かに暖炉の周りで自分の時間に嵌まり込んでいるみたいだ。会社の友達がおしえてくれたドランビューイを静かに空けているのが似つかわしい場所だ。これはとても強い蒸留酒で甘くてどろりとした食後酒だ。雪が降って、前の浜を真っ白にした。ドランビューイは僕に深い眠りをくれた。

このラクスにいた間に、確かに燦々と照る夏の陽射しを浜の芝生に見た。大雨の春の朝もあった。そして本当の真冬、凍り付く真冬、暖炉の前でヒュウヒュウという風と打ち寄せる波の音を、ドランビューイをなめなめ聞いた。ホテルの夕食はいつも一人。きまった席で、ホテルのきまりきったメニューを毎日とっかえひっかえ選んで食べる。イギリスの飯はまずいといわれているけど、やはり僕との相性が悪い。肉はちょっと堅いけどまだ我慢できる。魚は本当に駄目だ。一番まいったのは、毎日毎日付け合わせででてくる、焼いたトマトだ。中途半端に冷えていて、そのぐじゅっとしたその食感は全く耐えられない。毎晩サンテミリオンでそれらを流し込む。そして必ずでてくるクレソンを齧って口を洗う。そんな毎日が過ぎていく。ミラノの喧騒が懐かしくて困った。近くにはパブもない。一人でウイスキーをなめているだけだ。

週末は電車でエディンバラまで出かけた。グラスゴー経由でスコットランドの古い汽車で行く。ゆっくりとした旅だ。幸い天候は良い。エディンバラは本当にいい町で気に入った。素晴らしい店が続く。ゆったりとした構造の中に、とにかく光るものが悠然と存在している。エディンバラ城もちょうどいい高さにあって町を見下ろしている。歩いていて気持ちがいい。緑も多い。

土産にタータンを買おうと専門店に入って驚いた。すごい種類のタータンで、すべて由緒が明確だ。日本の家紋みたいなものだが、とにかく種類がすごい。しかも男性用と女性用とは少し模様が違うのだ。親切な店の女性のアドバイスで、気に入ったタータンを布のまま買った。結構の重さだ。

少し黒ずんだ石作り街を歩いていて夕方になると、冬の寒さが静かに背中から這い上ってくる。蛍光灯だらけの日本と違ってヨーロッパの街の明りは、すべてとっていいほど白色灯だ。どこか人恋しくさせる明りだ。パブの明りに魅せられてはいつかみる。パブはサルーンとバーになっている。サルーンでは座って、ちょっとした食事ができる。とにかく安くて手頃だ。自分の街ではない見知らぬ街での一人の酒は、どこかつまらない。石畳の歩道をこつこつと足音を響かせてホテルに帰る。夏は音楽祭で人が押し寄せるといってエディンバラも冬はさみしい。港からの船の汽笛がボーツツとなった。丘の上の城を歩いた事なんかを思い出しているうちに眠ってしまった。

その後何年もたってから、再びスコットランドに行った時、真夏のある週末、グリーンノックで友達になった若いスコットランド人のカップルと、夫婦でやってきていたアルゼンチンの2人と僕の合わせて5人で、スコットランドの湖水地方をドライブした。小さな車に乗って田舎を走り回った。どこまでも、どこまでも牧草と岩肌の道を行くと、牛の群れと羊の群れに出くわす。驚いたことに、牛の体毛がとても長い。冬の寒さに対応するために長くなった種類だという。30センチはあろうかと思われる毛並みで、体中をふさふさ揺らせながら牛たちがやってくる。面白い。

スコットランドのカップルが作ったサンドイッチにも驚かされた。白いパンとポテトチップスなのだから。フィッシュ・フライは知って居たけれど、ポテトチップス・サンドイッチはちょっと想像できなかった。でもビールと一緒に結構いけると知って二度びっくり。パースとかインバネスとか岩山と湖のほつりを、がんがん走って楽しかった。ラジオで「グアンタナメーラ」をやっていた。僕がちょっと口ずさんだらスコットランドのカップルが吹き出した。「だってスコットランドで日本人がスコットランド人とアルゼンチンの人の前で、南米の音楽を歌っているなんて！」ということになった。「そうだ。ちょっと変だぞ」。

そう言えばもっと変なことがあった。若いカップルに誘われて、夕方6時半にパーティにおいでと言われた。この時間だったら当然食事が出ると思って、飲み物なんかを買って彼等の部屋に行った。音楽を聴いたり、しゃべったり、つまみを食べたりして、そろそろ食事だろうなと思って心待ちにしているのに、何時まで経っても、なんにも食事が出てこない。おなかがすいたなあと思いながらパーティをやっていると、11時すぎになって、そのままお開きになってしまった。昼から食事抜きで、真夜中にホテルに帰ったら何にも食うものなし。仕方なく、ビールを2本ばかり飲んで、朝を迎えたことがある。スコットランドでは、パーティで6時すぎに始まるのは単なる飲み会だ、と教えてもらったのはその後だった。やはり所変われば、である。

スコットランドというと、僕はすぐスコッチウイスキーを思う。聞いてみると、日本で有名なブレンドものは、スコットランドではあまり飲まないのだという。チーバスもジョニウオーカーもバレンタインも皆飲まない。彼等は自分の好みのモルトを飲むのだという。グレンジランとかアンティークエリィとか、あまり日本には知られてないものが彼等の誇りだ。ちょっとやってみただけど、ブレンドに慣らされた僕にはそんなに美味くない。もっと後のことになるけど、アイリッシュ・ウイスキーがぼくの好みのものになってしまったのも不思議な気がする。

最初のスコットランドだった時、ラクスに滞在中、予言どおりのいろいろな天候を楽しんだ。霧の出た朝、迎えの黒いハイヤーでグラスゴー空港に向かった。カレドニアン・エアライン（カレドニアとはスコットランドのことだった）に乗り込んで、僕をつんぼの耳が突然直った。話されている言葉が分かるのだ。サザンプトン空港に下り立ったときは本当に助かったと思った。「そうさ、こうじゃなくちゃ」と思った。とても得難いスコットランドの旅は終わった。ハバントに帰る途中、飛沫のあがるポーツマスの波止場のパブで、でっかいビターをなめながらホット息をついた。イングランドでは、まあまあ英語が通じて快適な日々だった。

後日談だが、その後パリにあるI社のヨーロッパ本部に出張で滞在していた時、駐在員向け英語のクラス生徒募集が、カフェテリアの掲示板に張り出されていた。「このクラスに絶対に出席しなくちゃいけないのは、グリーンノックの奴らだけ」とそこにいたフランス人、ドイツ人、オランダ人、イタリア人、アメリカ人、そしてスコットランドから来ていた奴を含めて、僕たちは大笑いをした。ワインを飲むフランスの昼休みでの会話だった。

フランスの風と香りを吸って

フランスの風と香りを吸って

フランスの風と香りを吸って



南フランス・モンペリエの思い出

南フランス・モンペリエの思い出

モンペリエ

南フランスのモンペリエという街をご存知だろうか。地中海に面したマルセイユよりもっと西、スペイン寄りの古い街。フランスでも最も古い大学の一つがある小さな街。地中海からちょっと入った平野にある街。海まで車で10分も走ればパラバスという海岸に出る。モンペリエにはローマ時代の水道橋もある。まるで昔のままの城壁に囲まれたヨーロッパによくあるまちだ。

こんな町で、若い日に3か月を過ごした。もちろん仕事で。仲間は男ばかり僕を入れて同じ位の年頃5人。時は2月から5月初めの春の来る頃。ちょうど僕はイタリアからかえってきて、1年にもならず「ヨーロッパに帰りたい！帰りたい！」との気持ちで一杯の頃だった。

街はちっちゃいけれどなんでも揃っていて、オペラ劇場、1つ星レストラン、パリのブティックにも負けない店と町並み。街の中心はラ・コメディで真ん中にオペラ座、そしてカフェが回りを取り巻いている。天気の良い早春にそこに座ってぼんやりしていると、そのまんま時間が過ぎていくのが気持ちいい。街の中心の通りを登っていくとその先にはローマ時代の大きな水道橋がそびえている城跡に至る。そんな通りの中程に石畳の広場があって朝市が立つ。街の中は細い通りばかりで、車が通れるような道はわずかしかない。薄暗い細い道を歩いていると、いつのまにかこの広場に出てくる。朝市には花や野菜や肉なんかがテント小屋に賑やかに並ぶ。街中に生活のすべてがある。

僕の頭で苦労した床屋さんもこの広場にあった。なぜかと言うと、僕の髪は日本人にしても硬くて大変なのに、フランスの床屋さんは柔らかい細い髪になれていて、それにラゾー・カットをやるのだ。僕の髪はとても硬くて、ラゾーカットにはまったく適していない。とうとうその床屋さんは刃を駄目にした。僕は上客ではなかったに違いない。困った顔を今も思い出す。

モンペリエから車で10分も走ると、地中海に面したパラバスという海岸にでる。観光客用のレストランや、土産物屋が並んでいて、早い春には閑散とした雰囲気だ。このパラバスには、僕たちがモンペリエの下町に見つけた数少ない、いわゆる「バー」で働いている女の子が住んでいた。このバーに飲みについての深夜、僕の猛スピードの酔っ払い運転でよくこの女の子をパラバスの家まで皆で送って行った。もちろんむちゃな話だ。この店を見つけたのは、こんな方面ではとても鼻の利くMだった。そのバーは狭い石畳の路地に、壁に小さな赤いランプがついていて、ちょっと薄気味悪い、ひっそりとしたモンペリエの下町の一角にあった。日本のバーのような雰囲気があってくつろげて、金がない割に僕たちはよくたむろしたものだ。その女の子にちょっと気があったのは僕だった、もちろんそれだけだったが。

モンペリエではSとMと僕の3人が、ほとんどいつも組んで行動していて、ほかの2人は一人一人て動くのが常だった。この3人のうち車の運転ができるのはMと僕だったので、3人で一台の車に乗ってよく出かけたものだ。

僕たちがいたのは小さなホテルで、カフェも食堂もない、単なるシャワー付きの部屋があるだけのこれまた古い物だった。僕たちは長く滞在したので、いつの間にか朝のフレンチ・トーストとコーヒーだけは、特別にロビーで出してくれるようになった。

仕事には毎朝2台の車に分乗して、町の東にある会社まで出かけた。毎日、朝日が真正面から差し込んできて、運転しにくかったのを覚えている。そういえば、帰りも今度は西日がまたまた運転する僕の目に差し込んで、行きも帰りも太陽がかなり高くなるまで悩まされたのを覚えている。ホテルでも英語が話せる人はいなくて、僕たちはほんの片言のフランス語で会話していた。Sが大学時代にフ

フランス語を選択して助かった。

モンペリエの町では、金があればほんとに立派なレストランを楽しむこともできた。よく行ったのはトロア・ロアという町の真ん中にあるレストランだった。ここには大きな石の炉があって、目の前で肉でも魚でもお好みに合わせてグリルしてくれる。イタリアでもそうだったが、夕食はやっぱり2時間ぐらいかかっていた。4人で行ったときは、3本ぐらいのワインを開けていた。そのころのMは酒がほとんど飲めなく、Nもちょっと飲むと真っ赤になる人だったので、Sと僕が、完全に割り勘勝ちだった。Mはいつもエビアンかジュースで飯を食べていた。この店では頼めばピッツアも、その炉で焼いてくれた。でも庄巻はペッパー・ステーキだった。熱い肉の中はほんとうにやわらかく、ちょっと見には、まるで黒胡椒の塊のようなステーキはほんとうに旨かった。

毎日こんな所で飯は食えないから、ラ・コメディの近くのイタリアンレストランにも足を運んだ。ここでは僕のイタリア語が役に立って、店の家族とも仲良しになってしまった。その後何年も経って、モンペリエにいったとき大歓迎を受けたのを覚えている。ここではイタリア料理が安く食べられた。我々のお気に入りの店の一つになった。もっと金のないときなんかは、アルジェリア料理を安く食わせる店にも、勇気を奮って出かけた。米の料理とか、トウモロコシの粉で作った米に似た小さなパスタなんかを、クスクスというソースでからめた、スペインのパエリアのような皿を好んで食べたのを思い出す。そんな時はフランスの甘っぼいビールが付きものだ。グランドの近くのセルフ・セルビースは最後の砦だ。学生なんかもよく来る、安いが取り柄の店で、結構お世話になったものだ。ヴェトナム料理にチャレンジしたこともあった。

そんな食事の後では、下町のバーでコニャックかパスティスをやったものだ。パスティスというのはその昔、フランス人が好んで飲んだ、青臭いきちがい酒、アブサンを現代化した代物で水で割って飲む。水を入れると白濁する。僕はやっぱりコニャックのほうがよかった。

そんなバーの近くには屋台がでて牡蠣を食わせてくれた。これが嘘のように安くて、レモンと塩だけで食べる。パリの牡蠣屋でのバロンも旨いけれど、目の前の地中海で取れたユイトゥルもほんとうに美味かった。しかもいくらでも食べられた。幸せだった。とにかく外国に住んでいると、食べ物が非常に大切な生活の張り合いになってくる。

ラングドッグ

Sが車の運転を練習したいというので、僕とM、Sとでよく近くの町まででかけた。セーテ。ここはパリーダーカル・ラリーがフランス本土でも行われていたときには、ラリー車がここからみんな地中海を渡り、アフリカに舞台が移ったのだった。そのほか、グラン・モット、ル・グロ・デ・ロア、エグモルト、セントマリー・デウラメールなどロワール河口辺りをよく走ったものだ。この辺、カマルグには野生の馬が群れを作って暮らしている。どちらかという湿地帯で、広い草原に灌木が生えている。なかでもエグモルトはほんとうに昔の城が、そのまんま町として残っていて、時間を過去にスリップしたような変な感じになったものだ。もともとは海に面した城塞都市だったのだが、ローヌ川が土砂で海を遠くに運んでしまっ、今は陸の真ん中になってしまった。街の中はちゃんとした町並みが無人で続いていて、ちょっと変な感じだ。

もちろん近くのアルルとかニームなんかには皆と観光で行ったものだ。フランスに闘牛があるのをご存じだろうか。南フランスにはスペインの影響が強くあって、本場の闘牛をやっているには驚いた。ちゃんと牛を最後に殺してしまう。僕たちは何回かニームに闘牛を見にいったのを覚えている。小さいけれどちゃんとした闘牛場があって、試合の前には牛をちゃんと見ることもできる。白い乾いた砂地の闘牛場は楕円形をしていた。

僕たちが行ったとき面白いことが起こった。闘牛士が出てくるまで、牛を怒らせるためにいろんなことをやる。その中のひとつに、馬に乗った人が、槍で牛の背中を傷つけるのがあった。馬はしっかりよろいを着て、腹のあたりも防御している。馬の上の男たちが牛に槍をつきたてて血を流す。牛は痛がって荒れ狂う。ついには牛が怒って、馬の腹を角でついて馬を横倒しにしてしまった。馬も上に乗っていた人も大慌てだ。しかし牛は怒って攻撃の手を緩めない。慌てた闘牛士の助手たちが、牛の気を自分たちのほうに向けて、やっと馬と乗っていた人を救った。観衆から大拍手だ。それは牛に対

して、そして馬に対してだ。その後、闘牛が現れた。しかし、その後も思わぬことがいくつか起こった。闘牛士は何人も出てくるのだが、うまい奴とそうでないのがいる。へたくそなのが一人いて、ちゃんと牛を扱えない。ついには牛に引っ掛けられて宙高く舞った。観客から悲鳴が上がった。もちろん大変なことにはならずすんだ。

闘牛士は本当に格好いい。パトロン、パトロネがついていて、試合が終わると牛の耳を切り取ってそのパトロンに投げて贈る。それが礼儀なのだ。ワインとバケットを手に、人々は一日を興奮して過ごすことができる。一日に何頭もの牛が死んで行って一日のトロが終わる。明るいニームの楽しい一日だった。残念ながら、スペインの闘牛は見たことがないけれど、フランス人の友人に聞くと、フランスのほうが小規模ですぐ近くで見ることができて、興奮するといっていた。本当かどうかは僕には分からない。

ミヨウ

モンペリエでは結構小さなドライブに出かけた。マルセイユにブーヤベースを食べに行ったり、グラスまで香水工場の見学に行ったり、それを日帰りでやっちゃうので結構疲れる。一人ですごく楽しんだのはゴルジュ・デウ・タルン「タルンの喉」という谷をドライブした時だ。フランス中央高地の中の谷で、アメリカのグランドキャニオンを小さくしたような谷だ。48号線を北西に上って行って山に入る。谷への入り口がミヨウという町だ。ここからフロラクまでの80キロ位の谷が続く。古い小さな館がレストランになっていたり、手彫りのサボヤ、いろんな木工品を売っている小さな店と出合ったりして、風景と村がそのまま中世フランスのようだ。ちょっとした高地が、羊たちの群れを見せていて、田舎だけれどちゃんと人が住んでいる。谷川の水量は豊かで、しかも急流だ。岩にぶつかって白い波をかんでいる。流れの辺には、必ず柳が生えていて岸を守っている。こういう時、その感動を分かち合う人がいないのは、ちょっとさびしいなとも思う。

ワイン付きの昼飯をとりながら、自分の心の記録にこの風景と雰囲気を感じ込める。急流と高い頂にさえぎられた狭い空を仰ぎ見ながら谷をさかのぼる。やがてフロラクに至る。後で知ったのだが、このあたりはロックフォール・チーズの産地だった。ここからは川と分かれて厳しい山道だ。舗装はされているのだが、細い曲がりくねった道が急な登り坂になる。モンテ・エグアルへの登りだ。エンジンがうる。タイヤもきしむ。沢の水が道をぬらしている。九十九折の細道を上り詰めると、フランス中央高地の高台が見通せる。

疲れを取るために休憩。道の際に落ちてきている沢の水で顔を洗う。冷たくて気持ち良い。顔をめぐってふと気が付くと、僕の眼鏡がない。顔を洗う時に、ちょっと近くの草の上においたのに。ぞっとした。こんな険しい山道を、近眼の僕が眼鏡もなく降りて行くなんて。あせった。よく周りが見えないのだが、とにかくそのあたりの叢を探る。でも見つからない。あせりの汗が噴き出してきた。小さな沢を探って、流れにそって小さな滝壺に届く。慎重に慎重に底をさぐる。そこから下は、さらにはるか下まで沢が落ち込んでいる。とうとうと水は流れつづけている。軽い眼鏡はさらに流れて行ってしまふかもしれないのだ。どのくらい時間が経ったのか分からないが、水のよどみに硬いものを探り当てた。あった。本当にほっとした。こんな危険がすぐそばに存在するなんて、という心境だった。眼鏡をかけて周りを見た。ほんとにもうちょっとのところ、下の下まで落ちる急な流れになっていた。心を落ち着けるために深呼吸をした。沢の水を手ですくって飲んだ。うまかった。3桁の道路標識を離れてやっとふもとの2桁の道に出た。モンペリエまでは一気の下りだった。楽しさと怖さを味わったドライブだった。

バルセロナ

もう時効だから話してもいいと思う。復活祭の休みに、みんなでスペインのバルセロナまで出かけたことを書こう。

じつは日本から来た女の子がモンペリエの大学に通っていた。その女の子は、Mを好きになってしまって、Mも独身だったから、テニスを教えたりして、結構楽しんでた。ちょっと太目のその子は、美人とはいえないが、かわいらしい女の子だった。M、S、Hと僕に、その女の子と一緒に2台の車で出かけた。南フランスの海岸を地中海にそってどんどん西に走っていった。ナルボンヌ、ペル

ピアノンを抜けていよいよスペイン。町並みも少しずつ、あくの強いスペイン風に、なってきた。なってきた。

バルセロナは港町、コロンブスの記念の塔が港にある。港から一直線のカタルーニア広場までの大きな通りが、ランブラス大通りで、通りの中央に幅広い歩道がある。そこを人たちが夕暮れになるとゆっくり歩く。車はその歩道の両側を流れている。おおきな街路樹があってとってもしつろげる通りだ。バルセロナではイタリアと同じで、夕方、人々が家族とか仲間とか恋人とかでゆっくり町を散歩するのだ。知り合いに合うとお互いに声をかけて挨拶を交わしている。けっこうみんな着飾った感じだ。

バルセロナで感激したのは日本の屋台みたいな店、バルだ。ちょっと簡単に、酒の肴になるものを目の前で作ってくれる。えびや小魚を炭火で焼いてくれたり、小さな烏賊をオリーブオイルでちょっとソテーしてくれたり、それをレモンと塩で食べるとほっとする。いかの墨煮に似た真っ黒いのが出た時は本当にびっくりした。うまかった。もちろん本当の夜の食事はレストランであるのだが、開くのは夜の9時過ぎだから、それまでのちょっと小腹がすいた時に、こんな店でアペリティーフを飲みながら人々は過ごすのだ。そんなことでもバルセロナが好きになってしまった。

バルセロナの夜をどう過ごすかが問題だった。その女の子はもちろんMと一緒にその夜を過ごすつもりだった。しかしその頃はどちらかという、Mはもうその女の子のことをちょっともてあましていたみたいで、割を食ったのは僕だった。食事に出かけるのは9時過ぎということで、その夜はナイトクラブでも行ってみようということになった。待ち合わせはホテルのロビーと決まって、おのおの自分の部屋に引き上げた。時間になって、ロビーで僕とHとその女の子とがいくら待っても、MもSも降りてこない。部屋に電話したけど誰も出ない。3人は待ちぼうけというわけだ。Hは、ちょっと僕は出かけてくる、といって一人で出かけてしまった。残った二人はどうしようもない。その子は、僕にとっては、Mの彼女以外の何者でもなくて、まったく個人的な興味はなかった。待っても、待ってもMは現れず、その子は泣き出しそうになって、僕が何とかしてあげるしかなくなってしまった。

結局仕方なく、その夜は彼女を僕が面倒を見ることになって、ナイトクラブに2人で出かけた。彼女のご機嫌はまあまあとゆうところで、深夜4時ごろの帰宅となった。僕にとっても、バルセロナのこの夜はとてつまらない思い出になってしまった。あとでMに詰問すると、その夜、SとMは前からの希望で、自分たちだけでバルセロナの女性と仲良くなりに行ったということだった。何だっ僕が彼女のめんどろを見なくちゃならないんだと、怒りがこみ上げてきた。あとでMは僕に謝った。これでMにおおきな貸しができたのは言うまでもない。

バルセロナの思い出はいっぱいだ。サクラダ・ファミリアのガウディもピカソも皮細工も、復活祭の仮面行列もピンチオの丘のチュウリップも、みんなみんないい思い出となった。4日間もいたのだろうか。郊外にも出かけた。罪滅ぼしだったのかもしれないが、Mと僕とで一日モンセラットという郊外の聖地に出かけた。カソリックの修道院のある古い山の聖地だ。高い岩山をうがった教会があって、ヨーロッパ中から信徒が巡礼してくる。高い岩山にロープウェイがかかっている、はるかバルセロナまで見渡せる高さだ。

フラメンコを見るにはかなりの覚悟がいる。始まるのは夜の10時過ぎだし、終わるのは朝4時ぐらいだ。ちゃんと腹ごしらえをして、徹夜のつもりで観にいかなければならない。すさまじいエネルギー、リズム、音、汗と集団の乱舞。観客もすごいエネルギーがいる。タバコと汗のにおいの中にいる時間から開放されて出てくると、夜明けの近い冷たい空気が心地よい。まったく異質の時間の中にいた自分を実感する。ちょっと経験できない余韻が、体のなかに続く。もう帰って一杯飲んで、朝寝をするしかないって感覚だ。でも驚いたことに、スペイン人達はその朝10時ぐらいからは働き出すっていうのだ。すごいとおもった。僕にはエネルギーが足りない。

バルセロナから帰って、仕事は期限に近くなってきつくなった。もう皆遊んではいられなくなった。しゃかりきで働いた。バルセロナと一緒にいった女の子と、Mがもめてるってことを聞いたけど、僕はどうしようもなかった。

日本に帰ってきて、しばらくしてMは別の女性と結婚した。小太りのモンペリエの女の子とは違っ

て、筋肉質のスポーツ好きの背の高い女性だった。

パリ、初めての

コンシェルジェ

あこがれのパリの日々はフォーブル・サントノレから始まった。初めての僕のパリ滞在にあったって、フランスの1社はホテルを、こともあろうにフォーブル・サントノレのど真ん中、エリゼー宮のはず向かいのクラシックなホテルにとってくれた。

もともとフランス本社はこの近くのパレス・ヴァンドームにあったのだから、彼らからすればフォーブル・サントノレにホテルをとっても不思議ではない。しかし、初めての旅人からすれば、アメリカ風な近代的なホテルしか想像していなかったから、とてもフランス、フランスした世界に偶然入り込んでしまったことになる。

四つ星のこのホテルのエレベーターは古く、ガラスと鉄柵に囲まれた優雅な乗り物だ。クラシックな口ビーの真ん中から静々と上っていく。建物全体が、どこか、かすかに古き時代の匂いを送ってくる。部屋は通りに面した古い色調で、バスタブはなくてシャワーだけだった。古い、古い匂いが染み付いているようだ。もちろん臭いわけではなくて、空気そのものがオーデコロンのような、遠い時の匂いがする。

ホテルを一步外に出ると、そこはもう有名な店の並ぶフォーブル・サントノレそのものだ。ついたときはもう夕暮れだったから、店のショウウィンドは灯が入って、きらきらと、とても優雅だ。ステンドグラスのような、光の屈折がとても店を美しく見せている。コンシェルジェと言う存在を知ったのもこのホテルだった。なんでも相談役で、コンシェルジェが紹介してくれたガイドと会うことになる。こちらの希望を聞いて、それに見合った良い店と一緒に付き合ってくれる。僕のフランス語は大学の第三外国語で1年やっただけだから、まったく駄目。そういう中での、このサービスは本当に助かった。

何が食べたいかといって、まずはうまいワインと牡蠣とすることになる。重い夕食は、いつでもどこでも取れるから、旅人にはちょっとというところを試してみることになる。白ワインがとてもよくて、牡蠣はいろんな種類が出てきて、どんどん食べられる。生臭さはまったくない。トッピングもいろいろ試してみる。何の脈絡も無く、パリにきたらエスカルゴを、ということになって、その店に連れて行ってもらう。ガーリックトーストとの相性が抜群。やっぱり、ちりちりに冷えた白ワインと言うことになる。あこがれのパリの夜は、ハッピーな夜になった。コンシェルジェのおかげだ。

モンマルトル

パリはメトロでどこにでも気軽に行ける。モンマルトルは親父の心のふるさと。ピガールで降りて、ゆっくりゆっくり丘を登っていくと、いっぱい、いっぱい懐かしい風景が現れてくる。もちろん物理的には初めてでも、どこかで見たユトリ口だったり、ロートレックだったり、佐伯や荻須の世界であったりする。デ・ジャヴというのが本当にいっぱい現れてくるのだ。

パリの建物は古くて、味がいっぱい染み込んでいる、という感じがする。坂道に広がる狭い小道を行くと、日本の焼鳥屋みたいな、串焼きを食べさせてくれる屋台みたいな店に出っくわす。串に刺した肉をワインで食べて、さらに歩く。パン屋さんから、長いフランスパンを小脇に抱えた、中年の男性が出てきたり、おじいさんが人力で木の荷車を引っ張っていたり、いたるところに生活が匂う。店の前の清掃もダイナミックだ。水道の蛇口を盛大にあけて、歩道側の側溝に水をザーッと流すと、どんどんごみが坂を水といっしょに下って行って、最後にマンホール口のなかに吸い込まれておしまいだ。

モンマルトルの丘の上から見ると、建物の屋根の煙突たちがとてもいい。いろんな形の、いろんな色の煙突たちが、一軒一軒のアパルトマンを代表しているかのようだ。モルタルの四角い煙突のてっぺんは、たいていオレンジ色の土管のようなパイプ状になっている。煤けて時間を感じさせてくれるものや、ちょっと割れて中の煤が真っ黒に見えたりする。そればかりをカメラで狙って見る。望遠で見ると、ずっと、ずっと、そんな煙突たちが果てしなくパリの町全体に広がっている。街に高低差がこれ

ほどないと、ちょっと気がつかない風景だ。そんな発見が、うんと得をした気分にしてくれる。

オレンジジュリーからマルモッタ

パリには、その後何回か滞在することになったが、たくさんあるパリの思い出の中で、やはり一番呆然と立ち尽くしたのは、オレンジジュリーで始めてモネの大作にとり囲まれたれた時だった。普通の展示室から階段を下りて、一階のちょっと薄暗い部屋に入ったときだった。僕は言葉も感覚も失って立ちすくんでいた。動けなかった。すごかった。少々薄暗い、オーバルな部屋に、モネの睡蓮の連作が置かれていた。

僕がやっと気がついて、中央においてあるイスに座り込んでしまったのはどのくらい経ってからだったろうか。とにかく長い長い時間がそこで流れた。MOMAで初めてモネを見たときも、やはりそうだったけれど、瞬間、どこか異次元の世界に自分が取り込まれた感じになる。この2部屋が、もう僕にとってパリでの一番の場所になっていた。

ブーロニユの森に近くにマルモッタを訪ねる。メトロをミュエットで降りて、ラヌラグの庭を横切って歩いていると、僕の大好きな犬、黒いシュナウツァーが颯爽と散歩している。ぼくはフランス語を話せないけれど、身振り手振りで飼主の女性の許可をえてカメラを取り出し、シャッターを切った。僕の家にいるのはミニチュアだけれど、やはり感じは同じだ。子供たちにいい土産ができた。その後、日本に帰って下のちびがスタンダード・シュナウツァーを飼いたいと言って困ったことになったのを思い出す。印象派がスタートする由縁の「日の出」をみてモネ三昧は終わった。

パリでは色んな美術館を見たが、僕にとってはモネと、ポンピドウ・センターのシャガールに尽きる。

ラ・デファンス

僕の仕事でのパリはラ・デファンスだ。最初に行ったときにはI社のヨーロッパ本部は確か、タワー・ノベルにあったと記憶しているが、その後はデファンスに自分の社屋、タワー・パスカルを建てて移ったので、ほとんどがタワー・パスカルの思い出だ。

パリに高層ビルができ始めたのはモンパルナスが最初だと思うが、本格的に高層ビル群が作られ始めたのは、パリの旧市街を離れ、セーヌを渡ったすぐのラ・デファンスだ。初めてセーヌを越えてタワー・ノベルの高みからパリを見たとき、「わー」と歓声を上げたのを覚えている。旧市内には基本的に高層ビルはなく、大体4, 5階までの建物に統一されて作られているから、タワーから見るとモンマルトルの丘までずっと見通せた。足元がセーヌ川まで鋭角に抉り取られているような錯覚に陥って、立ちすくんだ。

オペラから高速電車ですぐだが、ラ・デファンスはパリとは思えない。でも新宿の高層ビル群と違って、職住混在。人の住む沢山のアパートメントが、ビジネスタワーとうまく調和して建てられていて、単なる無機質な町になるのを防いでくれている。またタワーを含めた建物たちが、まるでデザイン・コンクールでもやっているかのように各々が個性的だ。それでいて全体の雰囲気壊している物はないのがうらやましい。

I社の連中もやはりフランス仕込みで、食べものには目がない。自分のビルには勿論立派なカフェテリアがあるのだが、「タワー・パスカルより、フランスI社の入っているタワー・フランクリンのカフェテリアの方が味がいい」と言って、昼休みにタワーの間の連絡通路をぞろぞろ、ぞろぞろかなりの社員が賑やかに移動する。もちろん僕も皆についていった。IDカードを見せれば自由にフランスI社に入ることができた。しかし、突然うまい昼飯をもとめての社員の大移動はできなくなった。僕のいた間に、会社は「フランスI社とヨーロッパI社は別会社。各々のカフェテリアへの補助金の支出も別々。だから、ヨーロッパI社の社員はタワー・フランクリンのカフェテリアを使用しないように」との通達が出た。その後、社員の間で当分ブツブツと不満の言葉が続いたのを覚えている。僕達は残念ながら、タワー・パスカルで食事するしかなくなった。

ラ・デファンスでの思い出のなかには、ちょっと苦い思い出がある。ラ・デファンスのヨーロッパパル社ではしょっちゅう、各国の人が集まって会議が行われる。その際もちろん公用語は英語だ。

会議で本当に悔しい思いを何回もした。例えば、20人位のいろいろな国の人たちが集まっての会議だとする。アメリカ人、イギリス人の英語はまあ何とか分かる。イタリア人、スペイン人、ドイツ人の英語は一度、頭のなかでちょっと考えと分ったりする。だが、僕がいくら頑張ってもフランス語圏の人の英語はもういけない。特にフランス語のイントネーション、アクセントで英語を話されるともういけない。

僕の耳はアイウエオを聞くようにできていて、アルファベットをそのまま聞き取れるようには残念ながらできていない。習い覚えた通りの発音とイントネーションで、英語が話されると何とか分かるのだが、フランス訛りの発音、イントネーション、アクセントで話されると、それは僕の英語プロセッサの能力を超えているのだ。会議で何回も聞き返して、理解しようとするのだが、僕一人のために、会議は待ってはくれない。会議はドンドン先にいってしまうことがある。特にフランス人が議長だったりするともうお手上げ、最悪だ。残念、困った、悔しいと何度思ったことか。

アルファベットを聞いて育った人たち、アルファベットを聞く耳をもった人たち、すなわち僕以外の全ての出席者は皆、フランス人の英語を完全に理解しているのだ。後になって少し慣れてくると、フランス訛の英語も耳に入ってくるようになったけれど、短期決戦の会議ではとても太刀打ちできない。「・・・アグレマンってなんだっけ？ アグリーメントなんだ」なんて考えているうちに会議は進む。その後、友達と話して分ったことだけれど、アルファベットをベースとする言語を話す人たちは100パーセント、その子音の発音を聞き取っているのだ。それは例えば、いくら強いインド訛で話されても、子音の多い北欧の国々の人たちの特有の発音も例外ではない。

後になって本で読んで分ったのだが、日本人以外の方は、子音のプロセスと母音のプロセスを、脳のなかで分離して行っているようだ。すなわち、子音は右脳、母音は左脳だそう。一方、日本人は、言語が身に着く3歳から4、5歳頃までに、子音を右脳でプロセスするように訓練されないと、子音も本来母音プロセッサである左脳によって、母音と一緒に処理されてしまうとのことだ。この幼児期の時機を逃がすと、その後いくら努力、訓練しても左脳の呪縛からは解き放たれない。結果として大部分の日本人は子音のプロセスが基本的に苦手なのだ。

原因は日本語。日本語では、子音が単独で存在することはほとんどなく、必ずと言っていいくらい、後ろに母音がかっついてくる。それで子音は右脳でプロセスされることなく、全て左脳にまとめて処理させていることになっているようだ。この現象は、日本語を話す日本人だけに、確認されている事象のようだ。バイリンガルと言われる人たちは3、4歳まで外国で暮らして、子音のプロセスが母音と無関係に聞き取れるらしい。僕のようにカタカナで英語を始めた人間にとってはまったくまったく、うらやましい限りだ。

でも、ラ・デファンスで、誰にも分らない英語をしゃべる人達いたのを述べておこう。それはれっきとした英国国民、スコットランド人の一部だった。彼らの発音は、同じイングランドの人たちにも分らないそう。とても妙な話ではある。

モスクワ・シェレメチボ空港

モスクワ・シェレメチボ空港

ヨーロッパへ飛ぶのに、昔はとてつもない遠回りをしていた。一番昔はアラスカ経由だった。しかもアンカレッジはまだ良いほうで、ひどい時はフェアバンクスなんて、アメリカ軍の北極基地があるような、氷の真ん中に飛んでから、パリとかロンドンに飛んだものだ。売店以外なんにも無いターミナルで1、2時間も待たされて、とにかく無駄だった。その後、やっとモスクワ経由で飛べるようになった。そのおかげでモスクワのシェレメチボなんて飛行場に何回か降りるはめになった。

ある時、大発見をした。滑走路の全体が、着陸する前にどういう加減か非常に良く見えた。びっくりした。一本の滑走路が、平らではないのだ。波打っていて、水平が出てはいないのだ。ちょうど雪が積もっていて、それで白い地面が起伏が起伏でグラデーションになっていて、はっきりその起伏が見えた。一本の滑走路が途中で二回も三回も、緩やかだけれど、丘になったり、下りになったりしているのだ。本当に驚いた。そこに、僕達の飛行機は、降りて行くのだ。着陸して、逆噴射をして、確かに停止するまで、機体がふわふわするのを感じてしまった。ロシア、その頃はまだソヴィエト連邦だったけど、やっぱり大まかなのかなと思った。

シェレメチボでは色々な物を買った。マトリョーシュカ、バラライカ、アルメニアのコニャックとか、キャビアだったりした。そんな売店とか食堂で見たのは、ロシア・スタイルの算盤だった。二段になっているのは日本の算盤と同じだが、五の位が五つ玉になっているのだ。どうやって繰り上がるのよく分からなかったけれど、とにかく太ったお婆さんがぱちぱちとそれで外国為替の計算して、それで金を払ったものだ。交換レートは、お婆さんにお任せで、信じるしかほかない。

よほどの事が無ければソヴィエトの飛行機には乗るな、という会社の指示があったが、やむをえず、何回か使ったことがある。ヨーロッパに向かう時に何時間も、シェレメチボ空港で待たされた事がある。きちっとした理由説明があるわけでもなく、狭く暗いターミナルで代替の飛行機が来るまで待たされた。まったくサービス精神は見られなかった。スチュワーデスは太ったお婆さん。にこりともしない。飛行中は乗客と同じ座席に座って眠り込む。ワゴンがしまっておりあるギャレットの留め金がちゃんとかかかってなくて、ちょっとした振動で扉が開いて中のプレートやなんか飛びだしてきても、我、関せずだ。これもびっくりだ。通路に食器なんか転がっていてもそのまま次のサービスを始めるまで置いておかれる。日本の飛行機に乗ったら、その違いに大感激だった。もちろんチョットやり過ぎのところもあると思うけど。

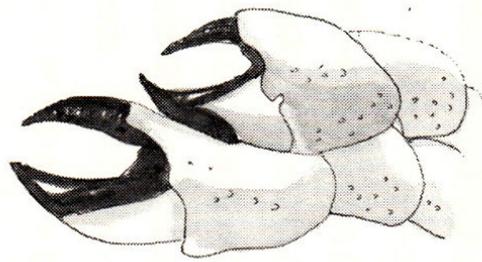
いつだったか、オランダの大学生たちと、東京行に乗り合わせたことがある。彼らは団体旅行で、半ばそのセクションは貸し切りになっていて、賑やかだった。酒が入っていて、たまたま近くに座っていた僕にもグラスを差し出してくれた。もちろん彼らの持ち込みのボトルで、強い酒だった。それはぼくが始めって知った「ジュニーブラ」と彼らの発音していたオランダ・ジンだった。ちょっと独特の匂いがするが、いい酒だった。またジュニーブラの入っていた、素焼きの、ちょっと茶っぽい、背の高いストレートなボトルがとても良くて、まだ半分以上も残っているボトルを、彼らから譲ってもらって、持って帰ったものだ。その後、僕の好きなジンの定番になった。

窓の下にはうねうねとシベリアの原野が川のうねりを見せているだけだから、他にすることもない。6時間以上も彼らと飲み続けた。全く修学旅行のノリだった。びっくりしたことが起こったのは、飛行機が日本海に出るとあっと言う間に本州の山々を飛び越えて、太平洋に出た時だった。飛行機が銚子沖の九十九里浜の上空を旋回し着陸のために高度を下げて、片方の翼を上げて機体を傾け、回転し始めた時だ。突然ざーっと、水が天井から窓をつたって、頭の上に降ってきた。右へ傾けば右側に、左へ傾けば今度は左側の窓を水が滴った。

あれは真夏だったのだ。軍用飛行機を改造したような代物だから、機体の気密性が弱くて、空気中の水分が、冷たい機体にふれて水滴に化けて天井一面に付いてしまっていたのだ。それが機体のバランスが崩れるたびに水の滝となって落ち込んで来たのだ。何しろ湿度の高い東京だから。悲鳴があがった。皆びっくりした。なかなか体験できない、希少な思い出だ。

それ以後は、再びソヴィエトの飛行機に乗る気はなくなった。

アメリカでの遭遇



ニューヨーク州

ニューヨーク州

道は歩けない

初めて僕がアメリカに足をふみいれたのは、ニューヨークのジョンFケネディ空港だった。初めてヨーロッパにいった時に比べると、僕の心のときめきは、そんなに高くはなかった。時は9月。ニューヨークに着く前、アラスカやカナダの上を飛んでいるとき見えた地面は、さいしょは真っ白な氷の原っぱ、それが深い赤の地面、さらにだんだん明るい赤に移っていった。ニューヨーク州の上空では、紅葉が緑と赤の混ぜ模様でとてもきれいで印象的だった。1973年から5年間の、大変なプロジェクトの始まりだった。

その頃、ニューヨークはとても怖いところだと聞かされていたから、僕たちはシティには泊まらず、頼んであったリモでニュージャージー州のラムゼーのモテール・ホリディインに入った。みんな10人ぐらいのグループだった。全員が自分の車を借りることはできなくて、数台の車でのグループ行動だった。

モテールのすぐ目の前に大きなショッピング・モールがあったが、ちょっと買い物ものに行きたいなと思っても、しかし、前は歩いては渡れないディバイデッド・フリーウェイだ。しょうがない。車に乗って次の町の出口まで行って、一度フリーウェイを降り、逆方向に走ってやっと目の前のショッピング・モールにたどり着く。人間が歩くことをとんでもなく拒否した世界だった。車が大前提の世界だった。こんなわけだから、一人で歩いてどこかへ行くということではできなくて、グループで車を使って動くことになる。これがみんなにとっては凄いストレスとなった。

僕たちが詰めるオフィスは、ルート17をさらに北に上がって山の中、スターリング・フォレストという湖のある自然公園の中にある、人里はなれたソフトウェア開発センターだった。なにしろ「人間は車に乗って移動する」という前提で町ができているから、住宅地の中以外では人が歩く歩道がない。そんな所のふつうの道を、ちょっと近くのレストランまで、5分ぐらいの距離をてくてく歩いて、7、8人ものが移動すると、次の日にはオフィス中の人々が心配して「何かあったのか？」と聞いてくる。親切なのだけれど「ちょっとわずらわしいな」ってな感じになる。それほど人が徒歩で歩くのが、不思議に見える土地柄のニューヨーク郊外だった。

道に沿って家が建っているが、それがまるで芝居の書き割りのように薄っぺらい。一列に並んだと家の裏は、もう森だ、林だ、何にもないだ。リスがぴょこぴょこ遊んでいる。やっぱり地べただなあ、と思う。西部劇なんかで、町の通りや商店とかがあって、その裏はもう原野ってのが出てきたけど、そのまんまがニューヨーク州やニュージャージー州の大部分の感じだった。

いろんな人種と一緒に暮らしているからだろうけど、ちょっとした注意書きも、僕たちからすると「きっちり書いてあるな！」ってな感じを受ける。公園に「ごみを捨てるな！」と書くところを「ここにごみを捨てる、あなたは120ドルの罰金を払うことになります」と書いてある。正確ではあるし、明文化してあるから、曖昧さは残らないが、ここまで書くのが誤解を生まない知恵なのだと思心したり、ちょっと考えちゃうなと思ったりもした。

家だって自分で作るんだ！

友達ができて彼のうちに呼ばれた。とても広い家で、周りは芝生と畑になっている。彼の住んでいる家は、彼が全部自分自身で、一部屋ずつ次々に作っているというのにはたまげた。もちろん、建物本体、屋根、外壁は最初に造ってしまう。最初は居間と食堂を完成させ、それから夫婦の寝室がちょうど今完成したばかりだという。DIYがマジで行われているのだ。子供たちの部屋は、今度君たちがくる頃には、完成しているだろうと言っていた。地下は彼の大きな工作室で、電動の大きなツールが完備している。ここで彼は休みになればこつこつと部品を作り、家具を作り、壁材

を切り出しているのだ。僕が行った時には、子供達のベッドの骨格が出来上がっていた。その馬力に感心した。

アメリカの男性諸君には、まだまだ西部開拓時代の、自分で何とかするという精神が、脈々と生きて、動いていることが印象深かった。その後、何年もの間、彼の家を訪ねることになるのだが、その度に少しずつ彼の家が完成に向かっていくのを確認することになった。彼にとって家を造るってのは、金を払ってぼんと造って終わりというのではないのだと納得した。彼に言わせると、ほんとうは凄い人種差別がアメリカはあるという。彼はドイツ系で、順番から言うと、プロテスタントでもどちらかという中くらいらしい。なにしろ「WASP」が幅を利かせているらしい。白人、アングロサクソンで、プロテスタントがそれらの意味だ。そんな中で彼は努力してアメリカの代表的な会社、I社で、それなりの地位にいる。しかし、彼に言わせると彼の生活レベルが普通だという。確かに考えようによってはかなり地味で質素かもしれない。日本では自分で部屋を造るなんてのは、どちらかという地味な感じだ。しかし彼らの考え方からするとまったく普通なことだという。彼にとって家は彼の手作りなのだ。

冬の間の食べる野菜類は、みなすべてが自家製だという。もちろん千坪もある家のまわりは、いくらでも畑にすることができる。奥さんの仕事だといっていたが、もちろん彼も休みには収穫なんかを手伝う。そして夏の間、大きな冷凍庫をいくつもいくつもいっぱいにしておくのだと言っていた。半地下には、そんな野菜のストックがいっぱいだった。自給自足に近いベースができていっているのには驚かされた。彼の住んでいるところはニューヨークから車で1時間ぐらいの郊外で、いわゆる田舎ではない。こんな生活が実質的なアメリカ人の生活だと驚いた。

働き者たち

日本人は働き者だといわれているけど、アメリカ人の働きぶりには驚いた。彼らは、定時に退社するのが普通だと思っていたけれど、僕たちの相手達はなかなかタフで、時間なんかあまり気にしないで、やる時はやるって感じだった。

前の夜（朝？）に、仲間と朝の1時、2時まで飲んで騒いでいても、翌日は眠い感じも出さずに、朝7時の会議なんかも平気でやってくる。どちらかという体力のない日本人のほうがオタオタしていることだってある。夜も仕事の進み具合では、夜の10時だって11時だってがんばってやっている。SEという特殊な世界だからかもしれないが、本当によく集中して働く仲間だった。

時間をも無視して、ちゃんと期限にまで仕事を上げるということよりも、もっと驚いたことは、彼らの自分自身の仕事に対する誇りと情熱だ。今回導入するシステムを、日本の実情に合わせてデザインを変更することが必要になった。そんな時、僕たち日本人たちもSEだから「ここをこんなふうにこう変更したい」と提案した場合、返ってくる答えは常にこうだった。「希望する機能を決めるのが君たちで、どのようにその要求を満たすかは僕、システム・デザイナーの問題だから、変更のデザインまで言う必要は無い」と。確かにオリジナルのデザインに責任を持ち、全体の姿を含めて彼の持つオーナーシップを考えればこの言葉はあたりまえだ。ところが僕たちも難しい変更を次から次にだしていく時、こうしたら簡単だなあなんて思って、解をつけて出していくと必ず反論が来る。「それは君たちの考えで、僕には解は不要だ。本当の解は僕の仕事だ。」とくる。最初の頃は、こんなことが積み重なると、感情が波立ってきて、いい関係とはいえない空気ができてきたこともある。

しかし、一緒になって、デザインを検証していく日々が何日も続くと、いつのまにか彼の言うことの正しさがわかってくる。部分しか知らない僕の考えは、思いもかけないところで使われているそのデザインに対して、もっと大きなミスを起こすような変更だったりする。

そして、彼が本当の解決策として構築したデザインは、徹底して明確に文書化され、関連システムのデザイナー達の出席する検証会議の「ウオーク・スルー」にかけられて擦り合わされる。こうしてデザインの正当性と透明性が徹底されて保たれる。その後やっとプログラムのスペックの作成にはいる。こうやって徹底したデザインの保証性が保たれてくのだ。感服した。そうでなくては、デザイナーの頭の中のみ、全くの「ブラックボックス」としてデザインが閉じ込められてしまうことになる。この方法は、その後日本で、システム・メンテナンスを担当する我々にとって、大変重要な技

術となった。彼らは「ホワイトボックス」化のノウハウを、具体的に我々に教えてくれた。そしてこの手法は、単にシステム・デザインの領域だけではなく、プログラミングの方法だとか、はたまたシステムオペレーションの組み方までに及んだ。こうして、彼らは自分たちが作り上げてちゃんと運用しているシステムについて、絶対的な自信と誇りを持っていた。

そんなふうに時間が過ぎて、いつか僕たち日本人チームは「問題を解決する提案」よりも「解くべき問題をきちんと定義する」こと、そして「新しい彼らの変更が、本当に我々の問題を解決したか？」の検証に、自分達の役割を変更していった。それがオーナーシップを持った彼らに対するベストのアプローチになった。物の考え方が、一ヶ月も共にやっていると見えてきた。それがとてもいい信頼を生んでいった。最初のデザインが完成した3カ月後には、日本人もアメリカ人もすっかり一つのチームに変身していた。

ニューヨークの郊外

ハドソン川を東から西に渡る橋の一つに僕たちがよく使ったタッパンジー橋がある。ニューヨーク・ハイウェイの3マイルにもおよぶ有料橋だ。最初びっくりした。トルゲートが東向きにしかないのだ。西へ向う車は通行料を払う必要がない。聞いてみると「どうせ奴らは、またきつと西から東へ帰って来るんだから、その時にもらおう」って言うのだ。いかにも大らかなアメリカらしい発想だと感心してしまった。3マイルは本当に長い。

少し行くとセブンレーク・パークウェイへの出口になる。ここには一人で、時にはみんなで、よく気楽にドライブに出かけたものだ。ハリマン・ベアー・マウンテン州立公園の中を走る。小さな湖がいっぱいあって、森の中にキャンプ場やバーベキューサイトが散在している。秋の紅葉は本当に素晴らしかった。日本では奥入瀬渓谷とか奥日光とか紅葉の名所がいっぱいあるが、あえて言えばここセブンレークの紅葉のほうがかもともっと美しいと思った。寒暖の気温差が大きい大陸だから、9月の最初は緑と黄色のコントラスト、その後、赤と黄色と緑のない交ぜになって、最後は暗褐色とくすんだ紅葉色と黄色の病葉の組み合わせになる。その組み合わせが本当にきれいで何回も見に出かけた。ベアー・マウンテンにはスキー場がいくつもある。小規模のものだけど十分楽しめそうだった。夏には、湖で泳いだり、釣りをしたり、ボート遊びをしたり、ゆっくり時間を過ごす。ニューヨークの中心から一時間ちょっとでこんな自然いっぱいの世界に入っていける。

僕たちが詰めていたサイトは、冬には湖が凍ってスケートの名所になる。そんな所に雪が降った朝など、町から車で通勤するのはかなり大変だ。凍てついた細い道を登っていくことになる。大きな道はきちんと除雪もしてあるが、大きな道を離れて山に向かって細い道にはいっていくと、もうそこは大変。途中に小さな丘がある。平地から登って行って頂上。そこから一気に下る。この丘が難所だった。タイヤはスノーだから結構すべる。丘の向うからの対向車のことはよくわからないが、同じ方向に向かっている車たちは、先で何がおきているか丘の斜面だから良く見える。皆、前の車がその丘を越えていくのを下で順番待をしている。

前の車が、滑りながらでもうまく斜面の上がりきって峠の向うに消えると、次の車が、やおらスピードを上げてその登りを攻める。時にはうまく路面をつかめないで、途中で止まってしまって、ずるりと下がってくる車もある。そんな時のために、車は、かなり坂の手前で、前の車のチャレンジを見守っているのだ。やっと前がクリアされて自分の番になる。滑らないようにゆっくりとスピードを上げて坂に向う。登れそうかな、上がれるかなという自問自答が続く。何とか頂上にたどり着いたら、後はブレーキを踏まないで、何とかうまく転がして坂の底にたどり着く。これで、やっと会社に着くことができる。雪の季節は、こんなことの朝の繰り返しが続く。

このスターリングフォレストには、この他にユニークな、ここでしか味わえない道の状況がある。「鹿に注意！」の看板が道に出ている。結構狭い道だから、こんなを見るとブレーキに足が行く。それはでも本当に大切なことだったのだ。イギリスから来ていたアサイニーが、あるとき突然現れた鹿に衝突してしまった。車は大破して、大鹿は即死。そして彼は全治3ヶ月の大けがをしたのだ。動物が住んでいる領域に人が入り込んだ結果だった。だからここにアサインされると、オリエンテーションで必ず「鹿に注意！」ということになる。

ホワイトプレーンの冬

ホワイトプレーンの冬

ニューヨークのダウントウンから北へ1時間ほど走ると、もうそこはニューヨークの喧騒とは無関係な、自然の真っ只中に広がる住宅地だ。ウエストチェスター郡のホワイトプレーンという小さな町だ。もともとはニューヨークの街中を離れたニューヨーカー達が自分らしい住まいを求めてやって来たところだ。緑が多くて、なだらかな丘陵地でもある。

僕の会社のアジア・オセアニア本部は、あの大金持ち、ロックフェラー氏の持つ広大な林と住宅の散在する地域の中、池の辺に建てられていた。建物自体は結構でかいのだが、木々の間でこぢんまりと見える。環境協定がきっちり出来ていて、建物は周りの木立の中に、すっぽりと隠れることが条件。結果として、たったの2階建てしか認められなかった。もちろん自然だらけで、ちょっと足を伸ばすと、ハドソン川の川面が、ロックフェラー庭園の先に広がっていた。いろんな季節に訪れたが、冬には建物のすぐ側にある、小さな池に鴨たちがいっぱいやって来た。

こんな田舎にも、ちゃんとメーシーなんかがあって、いろんなブティックも結構あり、生活レベルは高いところだった。どうしてだったか忘れてしまったが、こんな田舎に極寒の2月のさなか、2、3週間も滞在することになってしまった。日本の冬の感覚で、トレンチコートとマフラー、それに現地で買った手袋で、この日々を過ごす羽目になった。

僕が滞在するホテルはちゃんとしたホテルで、モーテルではなかった。そのホテルは町中にあったが、ショッピングや食事にはどうしても外に出る。しかもこの年はやけに雪が多かった。町の中も雪だらけで、車は狭くなった道をすれ違うのにとっても苦労していた。もちろん歩きだって大変だ。薄い防寒着のために、僕の体は零下20度以下の寒さでこちこちになってしまった。ちょっと建物や車の外に出ると、背中がドンと押されるように寒さに押し上げられる。そうかといって、こちらの人たちが着ているような分厚い毛皮やキルティングのコートは買うのには抵抗がある。日本に持って帰っても、北海道かどこかの雪国に行かなくっちゃ、とても着られものじゃない。飛行機に乗っける荷物だって空気を運んでいるみたいになる。そんなわけで薄っぺらいトレンチコートでもって、その3週間ぐらいを我慢して過ごした。

その年は何時になく寒く、しかも雪が多かった。車を運転するのも大変。自分で運転して郊外のサイトまで通うのは危険だと思って、毎朝夕タクシーを頼む。日本でいうと函館ぐらいのニューヨークの北だから、車は当然チェーンを巻いて、スパイクだと思ふのに、簡単なスノータイヤのまんま走っていく。前の方に車が止まっていようものなら、遠くからポンピングしながら、すべるの計算しながら近づいていく。心のなかで「止まれ、止まれ！」と叫びはするが、自分でブレーキを踏んでいるわけではないから車は滑っていく。テカテカのアイスバーンのうえでは、こんな冷や汗も出るのだ。

田舎町でもやはり交通量が少ないと、森の中は深閑とした感じになる。鹿や熊も出て来るといふ所だから、公共交通機関はタクシー以外にはなんにもない。この冬は、僕のいた2、3週間の間に、そのサイトは何度か、急に雪のために閉鎖されることとなった。働いていたり、会議をしたりしていると、サイト全体に急に放送が流れる。「このサイトは午後3時を持って閉鎖されます。全員、退去してください。」という具合だ。僕は短期滞在者だから、そんなに知人はいない。町まで乗っけてもらう人を探すのが大変だ。みんな、あせっているから、人はどんだんいなくなってしまう。とにかく、町の方向へ帰る人を見つけるのが一苦労だ。いつもは一冬でこんなことが、繰り返されることはあまりない、ひどい冬だった。

ホワイトプレーンズ・ホテルは、とても静でしかも町中であって、食事に出かけるのも便利だった。行きつけは、いつのまにか僕の古い思いがそうさせたのだろうが、イタリアンレストランだった。ホテルから歩いて5分ぐらいの所にあった。僕が入っていくのは、いつもその店の裏口からだった。表にはかなり遠回りしていかないと辿りつけない。雪道で遠回りすることは無い。だから裏口専門だ。

凍てついた氷の世界から裏口に飛び込んだものだ。他にいく所があまりないから、いつのまにか、常連さんになってしまった。味はいいのだが、何しろグニャグニャの茹で過ぎスパゲティは、とてもたまらない。とっかえひっかえして、レストランのメニューをほとんど食べ尽くしてしまった。薄暗いランプにてらされた、木造小屋の雰囲気は懐かしい思い出になった。

寝るまでには、もっと大変な苦勞がある。ホテルの部屋のドアを開けるのは、本当に恐怖だ。静電気がバチンと襲ってくる。廊下は乾燥の局だからだ。悪いことに絨毯が電気を盛大に起こしてくれる。どんなにすり足を避けて歩いても、静電気は待っている。

ホテルの部屋でも大変なことが起きていた。空気が乾燥して、喉がガラガラ。風邪はなかなか治らない。仕方がないから、バスタブにお湯を落としてバスルームの扉を開け放して湿度を部屋に補給する。それでも足りないから、バスタオルをびしょびしょに濡らして、イスとかスタンドとかにかけておく。最後には床のカーペットに水を播く羽目になる。それでも空気はカラカラに乾燥していく。そんな日々が続き、ある日とんでもないことが起こった。僕の部屋の窓がどんどん見えなくなっていった。気がつくやうに、何時の間にか、僕の部屋の窓という窓は、全て天井から下の窓枠まで、ギッシリと厚いつららのような、氷で覆われてしまった。棒状の氷が窓のガラスに凍りつき、デコボコもできて氷柱そのものだ。もう透明なところはなくて、外はまったく見えない。厚いデコボコの曇りガラスの中に、いつか僕は閉じ込められてしまっていた。おかげで、僕の部屋はいつも薄暗くて、外のクリヤーな世界が見えてこない。何度か融かそうとして、手で撫でてみたのだが、とても間尺に合わない。手が冷たくなって、ちょっとだけ氷が手のなかで溶けるくらいのものだ。

そんな部屋に、メイドもあきれてはいたのだろうが、文句も言われず、僕はそのホテルで極寒の2月を過ごした。僕がその部屋を出た後に、その氷たちはどうなったのだろうかといつも思った。その後、僕はそのホテルに泊まるのをためらった。零下20度の冬は得難い思い出だ。

怖かったフライト

怖かったフライト

日本からのフライトでは、JFK（ジョン・F・ケネディ空港）への着陸は、遠くロングアイランドの沖の方まで、うんと迂回して大西洋の方から、陸に向かってアプローチするのが普通だ。しかし僕たちは、マンハッタンの高層ビル群をかすめながら、北のほうから直接、JFKに近づいたことがある。しかもふらつきながら。

僕たちはその日、ニューヨーク発・東京直行便を、出発ゲートでもう4時間以上も待っていた。メカニカル・トラブルという奴で、いつになったら直るのかな、と恨めしそうに鼻先のあたりのペンキがはがれた、ちょっと疲れたような感じのその機体を見ていた。飛行機に乗り込むアナウンスを待っていた。やっと搭乗開始で、その時点で東京に着くのはいつになるのかな、なんて考えていた。とにかく待ち疲れていた。

水平飛行に移るとすぐ食事になった。五大湖あたりを飛んでいる時にはもうコニャックなんかをなめていた。カナダ上空に入ったなと思っていると、急に大きく機体が揺れた。別に音はしない。しばらくしても機体の揺れは落ち着かない。どうしたんだろうと思って外を見ていた。主翼の上についている、機体を安定させる小さな板が、小刻みに動いて機体の左右への揺れを防いでいる。しかし、いつもと安定度が違う。ちょっと変だなと思った。

どのくらいそんな状態が続いたのかよく覚えていないが、アメリカ人機長のアナウンスがあった。この飛行機は、オイル圧力コントロールの機能が正常に働いていないので、機体を安定がうまく保てない状態にある。そのため手動で、機体の安定を保って飛んでいるとのことのように理解した。乗客の間にざわめきが起った。確かに機体は左右のバランスのとり方がスムーズではなくて、怖くはないのだが、一方の翼が反対側の翼より上に行ったり、逆に下に行ったりして水平が安定して保てていない。少し皆の間に動揺が広がった。

しばらくそのままのフライトが続き、機長から改めてアナウンスがあった。この飛行機は、安全のためJFKに引き返すとのことだった。太平洋を横断するのだから、安全は最重要だ。でもこの時から、僕たちの異常な経験が始まった。大きく片方の翼を上げてUターン。着陸時の安全のため、太平洋を横断するために積み込んだ満タンの燃料を空中放出するという。主翼の先から霧になって燃料が空中にばら撒かれていく。もちろん禁煙のサインは出ているのだが、雷かなんかで引火したらひとたまりもない。空は曇りだ。白く燃料のガスが流れ出て行くのを見ていた。その間も機体は小刻みに左右にゆれている。しかし直接的な危険は感じていなかった。とにかく早くJFKに戻ってくれと願っていた。カナダの、どこかの飛行場でもいいじゃないかとも考えた。

とても長くかんじられた時間が過ぎて飛行機は、ニューヨークに近づいた。その時だ。JFKに着陸するのに、その飛行機は、まさにマンハッタンの上空を低空で、しかも低速で飛行しているのを知ったのは...。機体はいぜんとして、チャリンコがふらつくように、左右にゆれて安定しない。高層ビルが、すぐ目の下にある。こんなところはふつう、飛べないなあと思った。いつものロングアイランドの姿はない。大西洋に出るようなそぶりはない。ああ、真っすぐに入っていくんだなと思った。

着陸用の大きなフラップが、ゴリゴリと音を立てて主翼から出て行く。それが風圧でゆれている。アナウンスがあって、僕たちは眼鏡をはずし、時計とか腕輪とか、身につけた金属という金属をはずし、すべての手荷物を格納した。そして、みんな自分のひざの上に上半身をつ伏し、防御の姿勢をとった。エンジン音が大きく聞こえる。突っ伏しているのだから外の様子は見えない。音と振動だけが僕たちへのフェードバックだ。高度を下げていくのが分かる。エンジン音が急に小さくなる。ゴゴゴオーンと振動がきた。着地だ。エンジンの逆噴射が異常に大きく響く。機体が滑走しているのが、とても長い時間に感じた。止まった！突然、皆が拍手した。よかったなーと、やっと顔をあげた。

窓の外を見ると、消防車が何台も我々の飛行機を取り囲んでいる。化学消防車やアンビュランスも

何台もやって来ている。消防車たちは放水銃をすべて我々の方に向けていつでも放水するぞ、と待ち構えているのが見える。すべての緊急車両が赤と青のランプを回転させている。非常事態なのだ。僕たちはすっかり取り囲まれている。その時、僕は始めて怖さを感じた。僕たちは本当に危険なのだ！エンジンは滑走路の真ん中で、シャットダウンされたままだ。自分でタクシーをして、ターミナルには行けない。空港は閉鎖されているようだ。

タグの車が来るのが見える。曇り空のJFKは、僕たちの飛行機を取り囲んで静かなように見える。静まり返っているように見える、何かが起こることを予想して？恐怖だ。やっとタグがやって来て、僕たちは彼に引かれてターミナルに向う。ゆっくりと機体が動いた。ほっとする。これでやっと休めるぞ、と。ところがだ、僕たちの機体がゆっくりとターミナルに向かう間も、緊急自動車たちは、僕たちに放水銃の銃口を向けたまま、そのままの陣形で、僕たちを取り囲んだまま飛行機について来るのだ。機体が発火する危険はまだ消えてはいないのだ。ゆっくりゆっくり僕の飛行機は、タグに引かれてターミナルに近づいて行った。

僕たちは、それからもまだ待たされた。すぐに変わりの飛行機が準備され、それに乗り換えて日本へ飛び立てると思っていた。ところが、航空会社は代替の機体は準備できないので、同じ機体を修理して日本まで飛ぶというのだ。「ちょっと待ってくれよ！」ってことになる。何人かはキャンセルして、その日、飛ぶのをやめたり、他の航空会社に便を変更したりしていた。僕たちはそれもできず、ロビーでぐったり疲れて、修理が終わるのを待っていた。おいおい、またこんなボロ飛行機で12時間も太平洋を越えるのかよって思いながら。どんどん僕たちを追い越して、日本に向けて飛び立つ、ほかの航空会社の飛行機を見上げながら、僕たちは待ちつづけた。

僕たちが、その同じ飛行機に乗って東京に到着したのは予定の20時間遅れ。最悪のフライトだった。

合衆国国道一号線

合衆国国道一号線

アメリカのルート001は何処から始まっているかご存じだろうか？フロリダ半島の南端から、さらにメキシコ湾に向かって小島が転々とつながった、もうキューバに近いさんご礁の島々の終点、キーウエストからだ。その町から、ルート001はアメリカ大陸の東海岸をドンドンと、ニューヨークに向かって北上していくのだ。

キーウエストは、マイアミから海上250キロは離れているのだろうか。僕達はそんな町に向かってマイアミから車にのって海の上を走っていった。キーウエストからキューバのハバナまで200キロ弱で、キューバは本当に目と鼻の先ということになる。

キーズというのは、片方がメキシコ湾、片方が大西洋の島々のつながりだ。さんご礁の小島たちが集まって、この海の上に陸地が点々とする構造を作ったようだ。キューバ危機の時に、これらの小島伝いにアメリカ軍が軍用道路を兼ねてつくった高速道路の橋が架かっている。ほとんど海の上にかかる橋だから、車の中からだと、窓の外は右も左もそのまま海。走っていると言うより、感覚的には自分が海の上を超低空で飛んでいるようだ。

そして行き止まりがキーウエストだ。一年中観光客が多くて、ヘミングウェイが好んで過ごした町でもある。南の花がいっぱい咲いていて、もちろんシーフードがとびきり安くておいしい。僕達はルート001の基点を確認してから食事をした。緑いっぱいの庭に並べられたテーブルで、南海の光を浴びてゆっくりと昼飯をとった。

行きも帰りも、車は海の上を飛んでいく。軽飛行機に乗って低空を飛んでいくみたいな感覚で、早く、しかし非常にゆっくりした感覚にもなる。対向車が視界に入ってくると、相対的なスピード感が急に戻ってくるのだが、そうでなければ単調な時間が過ぎていく。

ほんとうの楽しみ方は、どれか小さな島のひとつに泊まって、ゆっくりとメキシコ湾でヨットをやったり、海に潜ったり、釣りをしたり、美味しいものを食ったり、冷え切ったヴェルモットでもなめているのだろうが、旅人の我々にはとどまる島はない。すっ飛んでいくだけだ。せめてキーウエストでゆっくりと昼飯して、ショッピングを楽しんで、とんぼ返りでこのルート001を飛ばしてマイアミまで戻る。

海の上の島々ハイウェイが終わって、ワニのうじゃうじゃ住んでいる沼地に戻ると、もうそこはマイアミに近い。フロリダにはいっぱいワニが自生している。実はフロリダは湿地帯が多いのだ。僕の友達にフォート・ローダーデールに住んでいた奴が言っていたが、日本から連れていった芝犬が、家の前の沼でワニに襲われそうになったそうだ。気味の悪いところでもある。確かに沼地を覗き込んでみると、いるわ、いるわ。あまりかわいらしいとは思わない。

マイアミは大西洋に面した避寒地だ。何にもない。ハイ・シーズンは冬だ。冬はコンドミニアムもホテルも、部屋代がとっても高くなるって聞いた。僕達のホテルは浜辺に面している。フロリダ半島から見る大西洋から昇る太陽はでかくて壮観だった。特別に太平洋に昇る朝日と変りないはずだが、感覚的にはとても新鮮な感じだ。すごく早く目が覚めたからだろうか。浜へ出てみる。真東が浜の正面だ。広い砂浜は確かにきれいだ。日本で、ちんまりと切り取られた海岸を見慣れた僕には、広い広いと感じた。早朝は風も軽やかで、人々がジョギングで浜を遠くまで動いていく。

マイアミって特別どうってことはなく、日本で言えばいけば熱海みたいだ。古くからの湯治場のホテルをいっぱい集めて、そして大きくしたような感じのところだ。リタイアメントのお年寄りが日がな一日、いろんなことで時間を過ごすことができるように配慮されている。ダンスをしたり、バンドで音楽を聞いたり、カジノをやってみたり、泳いで見たり、適度な運動ができたり、もちろんうまい食事もできて、ダイエット食もあって、何でもお好み次第だ。ゆっくりと、しかしちょっとむなしい日々の連続だともいえるような感じだ。要はお年寄り中心の町で、若者は海でがんばるしかない

ような感じのところだ。フロリダは、退職したみんなが余生を過ごしたいと希望する特異な州だと聞いた。

フロリダでは、やはりシーフードが僕たち日本人には大受けだ。けっこう足繁く通うことになる。日本に比べると、ロブスターなんか安くて、びっくりするほどでかく、でもほんとうにおいしい。なかなか刺身ではだしてはくれないが、軽くボイルしたロブスターを、店が出すバターソースを断って、レモンと塩で食べる。こうすると日本人の味覚にぴったりだ。

フロリダでの大発見は、ストーンクラブと言う蟹だ。鮮やかなオレンジ色と、黒と白のペイントで色付けしたような、きれいな大きな爪がでてくる。しかも爪ばかりが出てくる。店で聞いた話では、このストーンクラブは非常に貴重な蟹で乱獲はできない。漁師は捕まえても、サイズを測り、小さいものは海に戻す。さらに立派に大きく蟹でも、両方の爪を一度に取ってしまったはいけないという規則があるそうだ。必ず一本の爪を残したまま海に放してやるのだそうだ。蟹はその残りの爪で漁をして生き延びる。そうするうちに、もう一度立派な爪が再生してくるのだそうだ。このアイデアには感心した。

石のように硬い殻を、道具を使って壊して爪を取り出すと、もうこれは二杯酢を作って食べるしかない。身が締まっていて、ほんとうにうまかった。この蟹を絶やさないために、手間ひまかかる漁をやっている漁師さん達に感謝だった。食べ終わって、フィンガーボールで手を洗って、白のワインに手を伸ばすとき、幸せの一語だ。

フロリダ東海岸には、フォート・ローダーデールとか、パームビーチとか素晴らしい町がいっぱいあるが、アメリカ人が言う、リタイアしたらフロリダに住みたい、と言う気持は、僕のものではないと言うのが感想だ。なんだか、あまりにもぐうたらな生活にどっぷり浸かってしまいそうだと思ったからだ。

オースティン

オースティン

テキサス州の州都はオースティン。とても小さな街ですが、僕にとっては大変思いで深い町だ。

テキサスと聞くと、どんなことを想像されるだろうか？西部劇の舞台で、ガンマンがいて、荒くれ者がいっぱいいて、デリカシーなんてものは、かけらさえもなさそうな感じがするのだが…。もちろんそれは偏見だって事が分かるけれど、僕のびっくりしたことは、これらの荒くれの男っぽい男性の後ろで、女の人たちは、とても考えられないほどかわいらしく、まるで妖精のように、しとやかに暮らしていることを発見したことだ。姿形もちょっと小柄で、体つきはかなりスレンダーで、フェミニンな服装の人が多し。荒くれ男のイメージと、そのまったく反対の女性らしい女の人が、このテキサスに住んでいるのは大発見。それは、僕たちがアメリカで出会った女性のイメージが、ニューヨークなんかで男性と対等にバンバン働いている活動的な、女性らしさなんてのは二の次だと自分自身で考えているかのような、パワフルな女性たちを見過ぎていたからかもしれない。

すごく逆説的な考えだが、男の人があまりにも男らしさを強調するのに反比例して、女性はより女々しく、男を頼って、彼らにもたれかかって、ゆだねて生活しているような感じをオースティンの町で出会った女性たちは醸し出していた。「荒々しい西部は、女性をより女性的に育てるんだ」と僕は思い込んでしまった。僕の最初に入った南部の雰囲気漂うホテルが、余計にそんな感じを与えてくれたのかもしれない。しかし、その後、僕の2、3度の、この街の滞在でも、ずっとこの印象がついてまわった。

この町で忘れられない店は、ダン・マクラウスキー・ブッチャーズ・ハウスだ。この店は、オースティンの下町に開いているステーキハウスだ。とても大きな肉を、やわらかく、しかも客の好みに合わせて焼いてくれる。とびきり美しい女性が、注文をとりにくる時から、もう他の店とは違う。お客様のテーブルまで、本物のちゃんとした生の肉の塊を持ってきて、相談に乗ってくれる。カットの種類と大きさを決め、焼き方を決め、とっておきの付けあわせをアドバイスをしてくれる。もちろん肉が焼きあがってくるまでは時間がかかる。しかしその時間がみんなにとって楽しい。待っている間の自分のアペリティーフと、もう食べ始めている客たちの肉の匂いで、口の中はもう、よだれでいっぱい。ウエイトレスのフェアリーな物腰が、やさしい店の感じをやはりちゃんと作り出している。

男を優しく優雅にもてなす女の役割を、十分意識してサービスをしているように見える。こんな感じは、北部の町のレストランでは決して期待できない。ニューヨークなんかでは有名な店でも、どさんと皿をテーブルの上に投げ出していくようなウエイトレスが、いっぱいいるんだから。だから僕は知人がオースティンに出かけるときは、この店をお勧めのリストに必ず入れている。

オースティンは大学の町でもある。ちっちゃな街で、中心部はたいてい歩いてどこへでもいける。南部連邦の旗が今も立つ州議事堂はテキサス大学のすぐ側だ。緑がいっぱいで、起伏のある町並みをそぞろ歩きするのも、良い感じだった。何か古い南部の暮らしが垣間見える町だった。

アメリカ西海岸

アメリカ西海岸

ルート101

僕は東海岸でルート001をフロリダで走ったことがあるが、西海岸で偶然ルート101を何回か走ったことがある。百番違いのルートナンバーだ。車を走らせているとアメリカ東海岸や中、南部と比べ西海岸はどんどん日本に近づいているのを実感させられる。ルート101を走っていると、東に比べて車の多さ、混雑度合い、運転の仕方や周りの風景がどんどん、東京っぽく変わってくる。

ああ、もう東京に近づいたんだなあって感じる。東の方で高速道路を走っていても、ゆったりとして、あまり緊張感あふれる運転にはならない。しかしカリフォルニアは違う。例えば車間隔はもう本当に短い。後ろからどんどん詰めてくる。前の車との距離を確保するのは大変難しい。運転マナーがひどい奴がいっぱい出てくる。割り込み、急ブレーキ、ウイカーなしの車線変更、何でもありだ。道路の周りに立つ看板たちも量も多くなるし、けばけばしくなってくる。周りの家たちも高速に沿ってずっと立込んでくる。カリフォルニアでの運転は、東京での運転への自然な準備のかもしれないと思う。サンフランシスコ、サンノゼ、モンレー、カーメルなんか僕が車で走ったところだが、西海岸の一番のメインだからかもしれない。

勿論、一番運転しにくいのは、サンフランシスコ市内には違いない。ケーブルカーが最優先で、信号も常識では考えられない変わり方をする。坂の途中に交差点の水平な踊り場みたいな場所があって、前後の急坂の見通しがあまり利かないところがある。最初に車を借りたのはダウンタウンだったから、高速に乗るまでは本当にひやひやだった。

サンフランシスコ

カリフォルニアというと、やっぱりサンフランシスコがすぐ頭に浮かんでくる。サンフランシスコには何度も行った。アメリカ東海岸、南部、北部への出張の時の行き帰りの途中泊に、もっぱらサンフランシスコを好んで選んだからだ。

前にも話したと思うけれど、ヨーロッパでの生活の体験、印象とそれによって影響されたぼくの価値観は、なかなかアメリカの世界を、そのまま楽しい素晴らしいものとして受け入れることを難しくした。アメリカと聞いても、あまり心が沸き立ってこないのだ。だからアメリカ出張の必要性が出てきたら、僕は積極的にできるだけ部下に譲ったものだ、部下には迷惑だったかもしれないが。そんなわけで、今だから言えるが、ヨーロッパへの出張はもちろんがんばってチャンスを必ず活かしたものだ。ひどい時なんかは、2週間のアメリカ出張に続いて、1週間日本にいて、すぐ3週間のヨーロッパ出張なんかを時差ぼけの連続にも負けずにやったものだ。

アメリカを、そんなに楽しみにしなかったのには訳がある。アメリカでは車が必需品。逆にいえば、人が安心してゆっくりと歩ける場所が少ないということになる。どこかのショッピング・モールの中なんかは別にして。だが、そんなアメリカの都会のなかで、このサンフランシスコは人が自分のペースで歩いてどこにでも行ける数少ない場所だ。人が歩いてどこにでも安心して行けるといえるのは、人にとって生活の本当の基本だと思う、車に頼らずに。

もちろんニューヨークもダウンタウンは人が歩いて行動できるけど、でもどこか危険な感じがして、なんとなく安心感がない。いつのまにか、目的の場所に向かってどんどん歩いて行っていると言う感じになってしまう。ゆったりと自分のペースで歩き回れるという感じにはならない。そこにいくと、サンフランシスコではケーブルカーは気楽に使えるし、何処で降りても迷子になる心配はない。方向感覚も得やすいし、おっかない人にもあまり出っくわす感じはない。ほんとうは怖いところはあるのだろう。サンフランシスコは、ホテルから歩いてどこにでも出かけられる気楽さがあって、とても良い。市内ももちろんだが、バートに乗ればオークランドも、バークレイやもっと東のラッファイエットもラクチンで歩いていける。

UCバークレイに一日遊びに出かけた。アメリカの大学のキャンパスの雰囲気味わいたくて。このキャンパスのゆったりとした感じは、僕の知っている日本の大学にはない。慶応の三田にしても、本郷の東大のキャンパスにしても、やはりちょっとせせこましい感じだ。それにしてもアメリカ人の母校の大学に対する個人的貢献はすごいと感じる。ちょっと金ができると、図書館だとか、ホールだとか、タワーだとかを寄付して、大学の施設をどんどん立派なものにしていっているのだ。社会的な貢献をすることが、立派になることが出来た人の当然の行為だと、彼らが考えているのが良くわかる。

ゆったりと寝転んで、スタジアムの観客席でフットボールの練習を見ていたり、大学生協の売店を冷やかしたり、ゆっくりした時間を楽しんだ。パークレイのメイン・ストリートをぶらついて、安い食事に出会って満足、満足の日。こんなことも車なしでのゆっくりした時間だ。

モントレーとカーメル

モントレー半島を訪ねることにしたのは、その近くのビッグサーにある、エサレンに滞在したことのある先輩に奨められたからだ。ルート101を3時間ばかり走ってサーリナスで高速を外れると、遠くに低い山の半島が見えてくる。

モントレーでは一方通行に本当に苦しめられた。町に入ると、行きたい所に行けずに、いつのまにか町の外に出てしまう。ダウンタウンのホテルを探して、かなり頭に来た。勿論海岸線を走っている分には全く快適なのだが。

太平洋に面した美しい海岸線だ。気分を変えてプラザホテルでランチを取る。優雅なサービスを受けながら、足元を洗う波の音を楽しみながら西海岸の空気を吸う。心がゆったりしてくる。

気がつくといろんなところに車をとめて、カメラを構えている自分に呆れてしまう。それほど、この太平洋に面した海岸線に沿って、ちっちゃな個性的な家がずっとずっと続いているのだ。むかし「いそしぎ」と言う映画で、太平洋に沈む夕日を無言で見ているシーンがあったのを覚えているが、そんな映画に出てくる小さな家を髣髴とさせるかわいい家たちが、きれいに並んでいる。そんな家、小屋が色とりどりに僕のカメラを誘ってくる。

17マイル・ドライブに入ると、そこは本当に美しいグリーン連続だ。ペブルビーチやサイプレス等の有名なゴルフコースが美しい海岸線に現れてくる。本当にゴルフって贅沢なスポーツなんだな、と思ってしまう。すぐ側の岩場には、アザラシやラッコが、有名なジャイアント・ケルプの森に群がる魚たちをあてに、のんびり暮らしている。これはちょっと日本にはない世界だなと思う。でもそんな時に、ちょっと誰かが一緒だったらいいなと思う。そうしたらこんな感動を共有できるのになあと思ってしまう。そして一番つまらないのは、食事のときだ。一人だといふ席は取れないし、いくら美味くても、あまりゆっくりできなくて、ほっとした食事にならないことが多い。海外ではどちらかと言うと、一人ぼっちで旅をしているのはちょっと変に見られるようだ。

カーメルは想像どおりのかわいい町だった。ここもゆったりと人が歩いて行動できる。雰囲気のあつよい町だ。車を投げ出して、ゆっくり、気の向くままに店を冷やかしながら浜まで歩いて行って、そして帰ってくる。カーメル・プラザで食事をしていたら、なんだか淋しくなってきた、もう2泊しようと思っていたのに、次の朝、がんばってルート101を飛ばしてサンフランシスコに帰ってきてしまった。エサレンの風景もみないで。

タホ湖

タホ湖

ミュリエル・ジェイムス博士のワークショップが開かれたのは、カルフォルニア州とネバダ州にまたがるタホ湖の夏だった。ミュリエルはその頃、毎年夏の間、このタホ湖でいくつかのワークショップを開いていた。一つのワークショップは基本的に週末を含んで一週間で構成されている。僕はそこで3週間過ごした。ミュリエルはTA（交流分析）の生みの親である、エリック・バーン博士の数少ない直弟子の一人で、世界的に知られた心理分析学者であり、TAの推進者だ。日本にも度々来て、講演やワークショップなどを開いている、明るい、人懐っこいおばあちゃん先生だ。

その夏のワークショップには、世界中から20人程が集まった。ミュリエルの指導を受けてTA（交流分析）をより深く体験するとか、今持っている問題から、精神的な健康を回復する目的とかで集まっていた。それは夕日に染まったタホ湖畔のバーベキュー・パーティーで始まった。ミュリエルの最愛のご主人であるアーニが準備してくれたバーベキューのためのいろんな食材と、火を作る道具達とビールが、私たちを浜で待っていた。そこに集まった人たちは人種はおろか、性、国籍、言葉、宗教、年齢、金持ちとか貧乏とか、職業、肌の色、などなどの属性のまったく違ういろんな人たちだった。僕の参加したワークショップには、アメリカ人、メキシコ人、スペイン人、ニュージーランド人、オーストラリア人、日本人、フランス人などが参加していて、本当に国際的なグループだった。夕日が落ちかかるタホの水辺が暗くなって、炎が明るさを増してその夜はふけていった。

ワークショップは、タホ湖の水辺にある林の中のコンドミニアムで行われた。すべての活動は、そんなコンドウでの疑似家族の縁組で始まる。ミュリエルがいろんなことを配慮して作る。全部で5家族が出来上がった。僕のところは5名の家族。日本からの肝っ玉母さん（有名な病院の女性の精神科医）、やんちゃな末っ子は若い日本人、分からず屋の長男はスペイン人、悩みの多いネブラスカのジュディ、そして僕。このグループで、最低1週間、24時間、4LDKのコンドウで、一緒に寝泊まりする、食事を作る、買い物に出掛ける、遊ぶ、話す。こんな環境だから必然的に仲良くなってしまおうし、隠し切れずに裸の自分が出る。そしていつのまにか家庭に似た家族の役割ができてしまう。例えば僕はさしずめ親父役とか...

午前と午後の合わせて6時間は、ミュリエル指導のワークショップが一つのコンドウに全員が集まって開かれる。TAはグループ・ワークが基本。TAは自分自身を良く知る為に、自分のやった行動、発言を、他の人がどのように受けとったのかを、率直に、しかし、肯定的な表現でフィードバックしてもらう。人は自分の行動については、なかなか自分自身で正確に知ることはできないからだ。

集まった人達の中には、他人との関わりの中でうまく行動できなくて、悩んだり、自分を否定したり、逆に他人を否定して問題を起こしている人などがいる。一方、長い間セラピストとして他人を助けることに専念していて、逆に自分自身が疲れてしまったお医者さんもいた。もちろんTAを勉強するために集まった人もいる。ミュリエル研究者でTA研究者である早稲田のF教授も一緒だった。いろんなモチベーションを持って集まった人たちだった。

基本的にTAは、人のパーソナリティは3つの要素でできていると考える。1つは「親」からの要素。2つ目は「理性的な、理論的」要素。そして3つ目は、「子供」の要素だ。これらの3つの要素が時と条件によって変化して現れてくる。ストレスを受けたり、自己否定などを受けたりすると、歪んだ行動を現わす。そして対人関係を悪くする。

ミュリエルのスーパー・バイズのもとで、TAの理論の理解と、そのサンプルとして、参加者の具体的な行動を分析することで、自分自身を深く知ることができてくる。そうして、最終的に自分自身で自分の問題や行動を自律的に解決していく。僕の場合は、とにかく自立心が強くて、ほかの人に「頼らない、甘えない」が強く出てしまって、人との間に垣根を作ってしまう傾向があった。ミュリエルのグループ・ワークに参加して、他人にたいして率直になって、自分の弱みも含めて、自分をそのまま開示することができるようになった。また時には他人に甘えてもいいんだよ、との許しを得た。これで本当に、他人との間でリラックスした関係ができる。大変な発見だった。

フィールドでのワークもすばらしい体験だった。シエラネバダ山脈の山奥に入り込んで、自分の深いところにある、自分の気づかない感情や問題の存在を発見するワークだった。深い森の中に、皆が一人一人ばらばらになって散っていく。自分一人になって、他の人は妨げない。頭の中は何も考えないで、空白な心の状況を作り出す。他の人にはできるだけ会わないようにして、森の中で一人ぼっちになって、体と心を一時間以上空っぽにする。無意識の感覚にしておくのだ。風が林の中を通り過ぎていく。2000メートルを越す高い峰が、空を区切っている。小川を渡る。

自分の感覚が真っ白いキャンバスになるのを気長に待つ。そして十分に空っぽになったら、今度は急に自分の感覚を積極的に、意識的に外の世界に向ける。そして何が自分に飛び込んでくるのかを見定めるために、目を見開いて鋭敏になる。そんな感覚で歩いていると、あるものが僕の感覚に飛び込んでくる。「僕はここにいますよ！」って無言で叫んでいる。それこそが自分の心を大きく占めているものなのだ。それは大きな木の切り株で、森のちょっとした空き地の真中に存在していた。そして、それは僕が長い間、面倒をみていなかった飼犬のアンナの姿だった。それは優しさだった。優しい気持ちを僕に起こさせてくれるのに十分だった。自分も十分に甘えられる優しい生き物だった。自分を開放して、弱さも、甘えもそのままにさせる自由な、そして自分をゆだねられる関係の象徴だった。純粹無垢なパートナーだった。「なんだ、僕は本当に優しいものを求めているのだ、飢えているのだ」と気がついた。

このフィールド・ワークの感想を僕とシェアし合った看護婦さんの場合、見つけたのは、日本のそれとは違って、とても巨大なアメリカの松ぼっくりだった。そして松ぼっくりを形作っている一つ一つの片の先をよく見てみると、そこには鋭い針が1本ずつ、生えていたのだ。彼女は看護婦としての自分の仕事をうまくやっていけなくなっていて、自信を失って、このワークショップに参加していた。なんとか自分の持っている問題の本質を見つけようとしていたのだ。彼女が発見したのは、自分の心の中に存在している他に対する「厳しさ、思いやり不足」の状態の自分を発見したのだ。ナースになった時、最初に持っていた優しさが何時の間にか荒んでいってしまって、患者さんに対して優しさを失ってしまっていた自分に気がついたのだ。女としてはイカツイ感じの彼女の厳しい感じの目に、その時涙が浮かんでいるのを見た。その日以後、ちょっと優しい顔を見せるようになっていた。

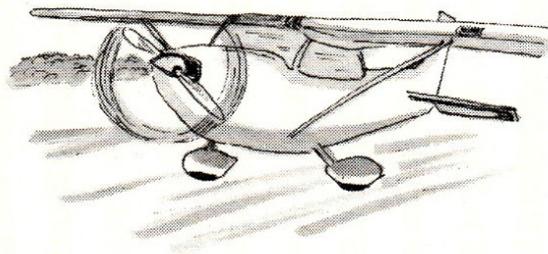
フィールド・ワークのなかで一番印象的だったのはプーリングだった。「人を信頼することができない人は、他人を当てしないから、他人の助けを決して受け入れられない」という、体験学習だった。プーリングはネバダ砂漠の中、カールトンシティの温泉プールで行われた。このワークは、基本的には人々が昔々母の子宮の羊水の中で、すべてから守られて、たゆたっていた幸せな感覚を追体験して、自分を完全に開放することができることを確認するのが目的だった。2人1組で、自分は上向きでプールにとにかく何もしないで浮く。もう一人が支えたり安心させたりして、浮いてもらう努力をする。2人の間に信頼感があって、力を抜いて任せきりになれば、自然と浮く。しかし心理的に信頼感の持てない相手だと、体のどこかに力が入って、バランスを崩して沈んでしまう。僕の相手のスペイン人は何回やっても沈んでしまった。僕はイグナチオに「僕を信頼してくれないのは淋しいな」と言った。彼は無心になった、その瞬間、彼は静かにプールに一人で浮かんでいた。感激だった。それから2人はもっと仲良くなった。そして自由に振る舞えた。

自分に対しての自然体、本来的な自分を開示することができれば、自分も自由だし対人関係も円滑。そしてお互いに、率直でポジティブなフィードバックができれば、より良い友人になれる。このワークショップでそんな体験をすることができた。この体験は、その後の僕の生活にとって非常に根本的な影響を与える本物だった。その後の、僕の生活の仕方ががらりと変わったのだ。

地球を歩き続けて

地球を歩き続けて

地球を歩き続けて



ブラッセル近郊、ラ・フルブ

ブラッセル近郊、ラ・フルブ

ベルギーの首都ブラッセルの南、ラ・フルブという小さな村に、1社のヨーロッパ教育センターがある。古戦場のワートルローの近く、森に囲まれた広いサイトだ。周りにはないも無い。田園と森がどこまでも続くベルギーの田舎だ。

ここにお客様を対象としたマネジメント教育や、コンピューター技術者教育が行われる施設がある。何日も滞在していただくわけだから、ホテル顔負けの宿泊施設、レストラン、バー、体を動かすジムやプール、広い森の中の夜も使える散歩道やジョギングの小道、バレーやバスケットコートなどもそろっている。

もう一つすばらしい施設がある。それは24時間オープンの図書館だ。もちろんコンピューターも使い放題。このサイトはお客様用の教育施設ではあるが、同時に社の技術専門教育にも使われる。一番長いのは3ヵ月にわたるSEグループの合宿教育課程だろう。だから24時間勉強できて、しかもグループで検討会が開ける場所が必要なのだ。

幸せにも、僕は3回ほどここで専門教育を受けた事がある。僕の一番長い滞在は3週間のコースだった。ここはブラッセル市内まで、車で30分弱の場所で、シャトルバスがブラッセルとの間にサービスされている。だからクラスが終わってから、夕方ブラッセル市内まで出かけることができる。最終バスはブラッセル中央駅の側から11時半発だから、けっこう夜のブラッセルも楽しむのは簡単だ。

グラン・プラスを中心とする旧市街は、とても居心地のいい場所だ。正面に向かって右側の建物、端っこの店はお気に入りの気持良いところ。軽く食事もできるが、ビールやアペリティーフを飲みながら街を眺めていると、いつのまにかどんどん時間がたっていく。4月に行ったときなんかは、暖炉に火が燃えていてとても気持ちいい。もちろん天気の良い日には、テラスに出て広場を眺めながらの時間となる。

ブラッセルと言えば、レースやチョコレートなんかが有名だ。しかし、ベルギーはあまり知られていないようだけれど、実は新鮮な海産物の豊かな国でもある。ちょっとグラン・プラスを離れて歩くと、そこには新鮮な魚介類のレストランがいっぱい並んでいる。牡蠣だとか、ちょっと下茹でした蟹、海老なんかも氷を敷いた大皿に乗って出てくる。しかも決して高くはない。店お勧めのバターベースのソースとか、マヨネーズソースもいいのだけれど、やはり僕にとってはレモンと塩が最高だ。冷たい白ワインと相性がよく、けっこうな量を食べている。夕方には各店が思い思いのデコレーションで客を招く。きれいで目移りする。

その道を有名な小便小僧の立つ路地の方へ歩いて行くと、すぐにムール貝で有名な店が現れる。ここでは大げさではなく、本当に洗面器ぐらいの大きさの鍋にいっぱい、ムール貝がワイン蒸になって香り高い大蒜ベースのソースに浸かって出てくる。そうすると、キリキリに冷えた白ワインの出番となる。一人で食べ切れるかなと心配する暇もなく、どんどん入って行って、いつのまにか鍋は空っぽになっている。付け合せの焼いた硬いパンも素晴らしい脇役だ。

ブラッセルにはたくさん、昔からのショッピングモールがある。全て屋根に囲まれた3、4階建ての空間が現れる。喧騒はなく、人々がゆっくりウインドウを眺めて、品定めしたり、買い物をしたり、ゆっくりとした時間がある。

2週間以上の滞在になると、なんとか宿題を早く片をつけて、週末によく出かけたものだ。ラ・フルブで知り合った若い友達たちと、アントワープやブルージュの町を訪ねたりした。でも彼らと濃い時間を過ごしたのは研修センターの中だった。一緒に飯を食ったり、課題で議論したり、はたまた一緒にビールを飲んだりだ。

ラ・フルブのレストランに隣接したバーでは、ウイスキーとかスピリッツのような強いお酒は置いていないが、ビールとかワインとかはサービスしていた。ここで僕の最大の発見はベルギー・ビールとの出会いだった。フランスにしても、イタリア、スペインにしても、これらラテンの国のビールは、ドイツやイギリスのビールと飲み比べてみると、どこか薄く、甘く、軽く感じて、僕はけっして手を出そうとはしなかった。

ところが、イギリスからきた友達に奨められて発見したのが「シーメイ」と言うベルギー・ビールだった。濃い色で、しかも香りが高い濃厚なビールだった。しかもそれを注ぐグラスは独特の形をしていて「シーメイ」の名前が入ったものだった。ビールは酸化や香りが飛ぶのを嫌って、縦長のずん胴のグラスで出されるのが普通だ。しかしこのグラスは、大きなシャンパングラスのような、口が大きく広がった美しい形をしたビアグラスだった。赤みを帯びた濃いビール色の液体を注ぐと、白い泡が広い口に厚く作られて、ビールを守ってくれる。ベルベットのような滑らかな濃い液体をすするりすするりと流し込む。素晴らしかった。

驚いたことにこのビールを造っているのは、修道院の尼さんたちだということだ。僕のビールについての概念を変えるものだった。こうして夜の更けるまで「シーメイ」の魅力に惹かれていた、僕と友達たちが記憶に立ち返ってくる。

実は日本に帰って「シーメイ」を探してみた。そして見つけた。ちゃんと赤と白とブルーがあった。僕の特別な時の、特別な人への贈り物として珍重させてもらっている、はるかなベルギーを懐かしみながら。

仕事のオーストラリア

仕事のオーストラリア

メルボルンの飛行場

メルボルン空港は大手航空会社の大型ジェット機の発着もあるが、もっと身近な空港でもある。僕たちはこの空港を何回も利用したが、それは小さな飛行機をタクシーとして使ったのだ。

オーストラリアでは小型飛行機がいろんな形で使われている。200キロも離れているところには車で歩いていられない。そこで貸しきりの小型プロペラ飛行機とかヘリコプターが皆の足としてチャーターされる。僕たちは、あるカスタマーのいろんなサイトを訪れるため、この小型飛行機のお世話になった。そんな中で愉快的なことがいろいろあった。

ある時は300キロも離れた地方都市のお客のところに行くのに、ちょっと大きめの飛行機を使った。僕たち客は7、8人一緒だったかと思う。双発の、ちょっと大きめの、定員10名ぐらいの飛行機だからクルーは2人いた。メルボルンの曇り空を飛び立って内陸に向かう。3000メートルぐらいに昇ると風が強い。めんどろみの良い、コーディネーターをしているMが、皆を良い座席に座らせて、自分は一番後に乗り込んで、飛行機の扉のすぐ後ろの狭い席に着いていた。彼の座っている前にある扉のまわりから風が入ってくる。みるとコックピットの上のランプが赤かく点滅していた。

クルーの一人が後ろの方にやって来て、扉をボタンと強く引っ張っている。何回か繰り返しているが、しかし赤ランプは消えない。飛行機の扉は完全には閉っていないようだ。それで風がひゅうひゅう入ってきていたわけだ。メカニックは肩をすくめて、しょうがないなといった感じでロープを取り出して、扉のハンドルを近くの柱に縛り付けてコックピットに帰っていった。それからMの大変な時間となった。フライトは2時間弱だったと思うけれど、Mはその間ずっとそのハンドルを、両手でしっかり引っ張り続けていた。そんな彼を見て、みんなは噴出したい気持ちと、もう一方では気の毒にとの気持ちが襲ってきて、口数が少なくなった。

Mは次のフライトからは、めんどろみのいい顔をかなぐり捨てて、お偉方たちをも先置いて早めに乗りこんで、扉から離れた良い席を占めていた。それが皆の笑いを誘っていたのを鮮明に思い出す。

キャンベラからの定期便

時刻表に乗っているけど、本当は飛ばないこともある定期便がある。オーストラリアの首都キャンベラは、メルボルンとシドニーの中間をわざわざ選んで造った、全くの人工の都市だ。このキャンベラから、さらに内陸に100キロほど入った田舎町まで行くには、単発の小型プロペラ機に頼るしかない。

これがその定期便なのだが、予定どおりには飛ばない。お客がいる場合のみのフライトになる。行きは良いとしても、目的地からのフライトは機材がなくなるんだけど、どうするんだろうなんて思ったけど、聞くのを忘れてしまった。

僕たち2人はとにかく予約を入れた。その飛行機は定員4人で僕たち2人が乗り込んでちょっと待っていると、子牛ほどもあるお尻のでかい、若い女の子が飛行機の狭い入り口をすり抜けて乗りこんできた。僕たち2人は後ろの1列にならんで座って、固唾を呑んで見ていた。どうやって座るのかなと心配しながら。その若い子は、前の2つの並んだ席を一つのでかいお尻で占拠して座り込んだ。僕たちは心配そうに顔を見合わせた。「この飛行機はちゃんと飛ぶのかな」と訝りながら。

パイロットは、これも結構太めのつるっばげのおじさんで、飛行機の透明なキャノピーは、そのおやじのつるっばげのすぐ上にあるから、紫外線がしょっちゅう、おやじの頭を刺激しているのを立証しているような感じだった。

僕たちの手荷物を客室のすぐ後ろの荷物入れに放り込んで、飛行機はエンジンを全開にして、一つしかないプロペラをきりきりと回して滑走路の方へタクシーを始めた。滑走路に近づいてエンジンはさらに高回転

だ。その時、ジープが何やら叫びながら飛行機と平行して突進してきた。パイロットはスピードを落とすて、ジープの男の言っている事を聞いていたが、飛行機がとまった。パイロットは扉を開けて降りていった。実は荷物室の扉がちゃんと閉っていなかったのだ。ポンと掘り込んだ僕たちの荷物は、飛行機が走るたびにボンボンと飛び跳ねていたのだ。幸いグランドの担当者が見つけてくれたから良かったものの、あのまま飛び立っていたらとしたら、僕たちの荷物はどうなっていたのだろうかと思や汗だった。

再度、単発機は思い切りエンジンを吹かして、やっと三人分ぐらいある若い女の子を持ち上げて飛び立った。フライト中はちゃんと飛行機が飛んでくれることを祈りながら手を握り締めていた。山脈を越えるとき、やはり飛行機はかなり揺れた。荷物室の扉が閉っていてよかったと実感した。とにかく僕たちは目的地に無事到着した。のんびりしたオーストラリアの田舎の思い出だ。

国旗たちの複雑なはためき

僕たちが訪れたクライアント企業は、もともとはオーストラリア軍の直系企業だった。だがその頃、親方日の丸ではないが、企業体質は古く、民間企業からの軍への納入や新しいオファーでその内部調達率は急激に低下していった。企業の存在意義が急速になくなっていったのだ。しかし、古き良き時代の雰囲気はそのまま、人達の間には温存されていた。

そのサイトにビジターがあると、入り口正面の国旗の掲揚柱にビジターの国旗を掲げるのが礼儀になっている。僕たちのグループは、アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、そして日本人で構成されていた。したがって歓迎の国旗はこんな国の旗がはためくことになる。僕は国旗を立てて迎えられるなんてことは期待もしていなかったし、経験もなかった。だから日の丸が掲げられているのを見たときは、ちょっとびっくりした。チョットは誇らしい気持ちもあったけれど、同時に第二次世界大戦の尾をひいて、対日感情が必ずしも本当のところでは良くない、保守的な雰囲気のある強い軍関係のサイト。日の丸を掲げた当直将校の気持ちが複雑なものとして透けてみえた気がした。

イギリスの影響が強く残っているこんなサイトでは、午後は立派なティータイムがある。ポットに入った紅茶、クリーム、そしてビスケットか軽いケーキがでてくる。なかなか、打ち解けた雰囲気にはならないで、アメリカ人が中心になって、クライアントとの関係を作って会議を行っていた。そんな中、日本のコンサルタントが黙って、ボーと突っ立っていて良い訳がない。僕は自分の下手な英語を最初に謝って、自分たちが体験した、自分の会社の改革について話し始めた。「技術革新が進んで、従来の工程、プロセスが不要になって来て急速に仕事が減ってきたこと」、「1400人の会社に700人分の仕事しかなかったこと」、「自分たちで、自分たちの仕事を新たに作り出すしか他になく、旧来の延長線上では何も未来が生まれない状態だったこと」、「新しいことを始めるには、そこにいる全員の危機感と、変革についての強い意志が必要だったこと」、「幸い技術は立派に持っていたこと」、「全く新しいことをやっていく、リスクをどんどん試していったこと」などを少しずつ話していった。

実体験に裏打ちされた話だったのが良かったのか、いつかそこにいる人たちの注意が暖かいものになっていった。彼ら、誇り高いオーストラリア人の心のどこかにあったかもしれない「肌の黄色い日本人に教を乞うことなんか何も無いよ」というような雰囲気ががらりと変わっていった。そのサイトの訪問は、とても印象に残るものになった。クライアントとの複雑さは、次第に解消していった。

香港

香港

6週間のクラス

香港には何回か行ったが、やはりコンサルタント教育の集中クラスが行われた述べ6週間が一番印象的だった。

最初のクラスは12月の4週間。香港の一番良い時期だと聞いた。湿度が低いのだ。香港は日本よりかなり南だし、海に面しているから湿度がとても高い。僕は湿度が苦手だから、一番湿度が低い12月が大助かりだった。雨の降らないし、風もさわやか。そうかと言って寒くはない。

実は、このクラスの続きのコースが次の年の4月に同じ所で行われたが、雨季、しかもどしゃ降りの梅雨みたいな日々がほとんど2週間続いた。もう僕は気分が落ち込んでしまって、毎日毎日ホテルの窓を流れ落ちる滝のような雨を恨めしく見ていた。これに比べれば、この最初のコースの12月は本当にすばらしい時季だった。

だから動き回れたのは最初の12月だった。その頃は香港が中国への返還直前で、まだまだヨーロッパのにおいが街に満ち溢れていた。イギリス系のデパートも元気だったし、街には英語が満ち溢れていた。泊まったホテルがJWマリオットだったから、まったくの香港島の中心にいたことになる。MTRと呼ばれる地下鉄が日常の足になった。

クラスは香港、中国、韓国、マレーシア、シンガポール、フィリピン、日本、そしてアメリカ人とオーストラリア人が混じって面白い仲間が集まった。毎日密度の濃いスクールが続く。入れ替わり立ち代り世界中から現職のコンサルタントが自分の得意とする領域について実技演習を基本に教えてくれる。中身が本当に濃い。部屋はマリオットの中にとられていているから、朝から晩まで、どうかすると真夜中までになる。

そんななかで楽しみだったのは、朝の10時と午後3時のお茶の時間だった。もちろん飲み物はコーヒー、中国茶、紅茶とファウンテン・タイプでマリオットの給仕人がサービスしてくれる。そして必ず中国的な菓子と、洋風なちょっとしたケーキが出される。それも何種類か。それに一緒に出される果物が切れることはない。みんなはちょっとした物をつまみながら、濃い科目の内容について語ったり、講師のことを評価したり、昨日行った店のことを話したり、とにかくコースから開放されて全くのリラックスタイムに変えてくれた。

もちろんその他に昼食も出るから、とにかく良く食べることになる。だから自分の体重コントロールが大変な課題になった。もちろん贅沢な悩みではあるのだが、終日コンサルタントの勉強だから、つい気分転換に食べることに集中してしまう。食べたいものがあり、自由に食べられる。しかし、ある時にはその誘惑を排除しなくてはならない。これは大きなストレスでもあった。僕ばかりではなく、太っちょのアメリカ人などは本当に驚くくらい甘いもの好きだから、その自分との戦いは相当激しいものだったろうと思う。

食べものの話になってしまったが、このコースでとにかく一番「目から鱗」だったのは物を見るその視点の定め方だった。1社に入社して20何年間、常に自分の視点はハード、ソフト、サービスを含めてのサービス提供者として、お客を自分の正面に座らせて見ている形、つまりお客さまを「相手」としてしか見てこなかった。それは、対する相手、時には対決するものとして、お客さまを見ていたことになる。テーブルを挟んで、こちらサイドには自分の会社だとか、自分の組織だとか、はたまたこちらの利益だとか、自分の都合などがあって、向こう側にはお客サイドの同じようなものが並んでいるといった対峙した形が存在していた。こうした構図がいつのまにか当たり前で、常識としていささかも疑うことすらなく自分のなかに存在していたのだ。

しかしこの視点は強く排除されることになった。コンサルタントの視点は、お客と同じサイドに並

んで座って、お客と同じ問題、課題を持って、それ以外の世界を眺める、もしくは其の課題と対峙する、という構図だった。すなわち、お客様の目で、見方で、サイドで物を見、そしてお客様の判断を深め正していくものだった。

だから、例えばコンピューターシステムを評価するとしたら、自分の会社、1社の製品をも厳正な評価対象に含まれるのだ。この視点の転換は本当に驚きだった。これこそコンサルタントとして、決して外してはならない、もっとも大切な視点で、いかにしても守るべき最低の原則だった。現実、このコースで出会った30、40人もコンサルタントたちは、それを当然のこととして身に付ける身に付けていた。僕の学んだ最大の、最高に大切なことは、この一点だった。そしてこの視点以外では物事の判断はしてならないということだった。僕に与えた影響は強烈だった。

ラマ島への遠足

香港島の周りにはいっぱい小さな島がある。その一つがラマ島だ。セントラルから小さなフェリーに乗れば30、40分で着いてしまう、香港島の南の島だ。クラスのみんなで一日、遠足に出かけたことがある。車の走る道がないので、みんな歩きの静かな島だ。南部のフェリーの港から、北部もう一つのフェリーの出る港町の間が2時間ぐらいでゆっくり歩けるハイキング・コースになっている。途中に、ちゃんとした島の頂の山もあって、そこからの南シナ海、香港島、中国大陸の山なんかも見渡せてとてもものんびりとしたコースだ。北の港の近くには、浜に日本の「海の家」のようなレストランがたくさん並んでいる。そこは安くて新鮮な海鮮料理を食べさせてくれる店だ。

北の港についたら、もう帰りはフェリーに乗るだけだから、みんなで気軽になって魚料理を食って、酒を飲んだ。クラスでああでもない、こうでもないとギャギャやっているときに生まれたちょっとしたわだかまりなんか、こんなふうに皆で一緒に酒を飲んで語っているとずっと融けていく。

シンガポールとかマレーシアとかフィリピンの人たちは2、3人ずつぐらいで、クラスではちょっと淋しそうだったけれど、こんな遠足で、他の国の人たちとも仲良くなって本当のグループができていった。それにしても大きなイセエビの焼き物は、白ワインととてもいいマッチングだった。いろんな種類の魚介を堪能した。帰り、夕暮れのフェリーの甲板にみんなが集まって、いつか、みんなで歌える歌をみんなで歌っていた。けっこう、みんなが知っている歌があったのには驚いた。セントラルの夜景は波にゆれていた。

トンネルと列車

比較的軽い宿題の出たある週末、ふと思いついて中国との国境の深圳に行ってみることにした。MTRで九龍サイドのカオルーン・トンまで行って、そこから九広鉄道にのって40分ぐらいで香港サイドの最後の駅、羅湖に着いてしまう。途中はニューテリトリイと呼ばれる地域で、新しい香港がどんどん北に発展しているのが良くわかる。新しい高層アパートがドンドン建っている。その量は半端じゃない。すごいエネルギーを感じてしまう。深圳には簡単に入れると思っていたが、チャンとビザが必要で、一時間ぐらい待てばそこで日数限定のビザが出ると言う。ちょっと待つのはかったるくて、そこからまた香港に戻ることにした。途中の大きな新興住宅地の真ん中にあるファンリン駅に降りて周りをみてまわった。なんだか日本の新しいベッドタウンそのまま、若い人たちが高層アパートに、モダンな生活をはじめているのが感じられた。住みやすそうな現代的な団地風景だ。

帰りの電車でとんでもないことが起こった。僕たちが香港行きの電車をファンリンで待っていた時、そのホームを長い長い貨物列車が香港の九龍にむかってすごいスピードで通過していった。その瞬間、土埃のような粉っぽい埃がわっと舞い上がった。同時に強烈な臭い匂いがホームいっぱいにあふれた。良く見るとみんな有蓋貨車だけれど、ほとんどが単なる金網とか柵とかの側壁に囲まれた動物の運搬用の貨車だった。その貨車なかには豚、鶏、牛、ダックだとか色んな動物が詰め込まれていた。もちろん皆生きているまんまだ。そしてそれらの貨車からは、彼らの排泄物が垂れ流しになっている。しぶきとか固形物も飛んできそうな感じだ。まいった。電車を待っていたほかの乗客も顔をしかめて、でもどこか笑いがこぼれて、ウンザリした感じで通過を見守った。長い時間だった。

羅湖始発の僕たちの電車が来てやっと乗り込んだ。電車はかなりのスピードで九龍に向かって走っていく。田園風景が続く。皆どこかほっとした感じでゆったりと電車の振動に身を任せていた。と、

突然僕たちの悲劇が始まった。電車がちょっと暗闇に入ったなと思ったら強烈な臭気が僕達の客車を満たした。あの耐えがたい匂いだった。僕たちの電車は九龍に入るため、4、5分間もの間長いトンネルの中に入ったのだ。そして、僕達の直前を、あの家禽列車がトンネルの中にとっぴりとその強烈な臭気と埃とを振り撒き、残して疾走しているのだ。もう逃げることはできない。耐えるしかない。窓は閉まっていてもちゃんと猛烈な匂いは入り込んでくる。本当に長いトンネルだった。

後で香港のクラスメートに聞いてみると、香港は全ての食料を中国本土に頼っていて、食肉という食肉は生きたまま、あおして毎日毎日運ばれてくるのだそう。その大切な食料列車に運悪くお付き合いしたというわけだ。でもあの長い貨車たちに乗っていた生き物たちが、ひとつ残らず香港の胃袋のなかに納まってしまおうというのは一つの感嘆でもあった。僕は夕闇のせまる、まだ残り香がかすかにするカオルーン・トン駅で早々と地下鉄に乗り換えた。悪い残り香が染み付いてはいないだろうかと思いつきながら。

ぼけーっとマカオ

缶詰教育で煮詰まってくると、みんないろいろな方法で自分を解放することになる。何しろ、実際のコンサルタントが、本当のケースで出遭った問題を題材に、自分達でコンサルタントのやるプロセスを実行する。勿論チューターがついて。時には2、3日で150ページもある、ペンギンブックを読んでしまうなんて宿題が出る。読むことが目的ではなく、そこに書いてある方法とか、考え方を理解して、出された宿題を解くというようなケースが何回かあった。まいってしまう。いくらがんばっても1ページ5分としても、150ページを理解するには12時間もかかってしまう。ネイティブの連中にはかなわない。しかし香港の人やシンガポール、マレーシア、フィリッピンの連中にとって英語はそんなに苦ではないのだ。苦労していたのは韓国人と僕たち日本人だ。韓国の連中に言わせると、教育については、日本の悪いところをそのまま韓国は取り入れてしまったとか。受験勉強中心で、英語は読み、書き、文法中心で話せない。読むのだからそんな長文は苦手だとか。僕と同じ。

そんな日々が一段落した時、一日マカオに一人で出かけた。ジェットfoilに乗って香港から一時間。南シナ海を珠江の河口を横切っていく。河口に近づくと水の色が黒っぽく変わってくる。そしてどこか生臭いにおいが湧き上がってくる。波しぶきの間に中国民衆の生活の息吹が感じられる。

マカオはきれいな町と、とてつもなく汚い町の混在だ。フェリー乗り場から島を一周するバスに乗ってみた。めちゃめちゃに汚い中国風の町並みが続く西側、きれいな南側とはっきり分かれている。一周してから、あらためて港から歩き始めた。島の中央部にポルトガル領時代のモニュメントがたくさん残っている。島の最高峰の砦や砲台を見て、下ったり上ったりの道が続く。とにかくゆっくりだが良く歩いた。

疲れ果てて、2時過ぎに島の南の端に近い所に偶然見つけた、ポウサダ・リッツという、こぢんまりとしたホテルのテラスに座っていた。疲れて座り込んだというのがあたりかもしれない。しかしいい眺めだった。前は南シナ海。ちょっと先にマカオとタイパ島を結ぶ、海上に架かる長い橋が見える。僕は冷菜とシャブリをとって、ゆっくりと時間を過ごした。動きたくなかった。中国人とポルトガル人のミックスと思われる美しいウエイトレスはよく訓練されていて、必要以上には干渉しなかった。僕の後ろの方では、団体客らしいざわめきがあったが、僕の周りは静寂だった。一本では飲み足りなくて、グラスでワインを何杯か追加した。明るい光はゆっくり夕闇に近づいていった。素晴らしい一日だった。

雨のスタンレー

残念ながら雨季の最中だった4月コースの香港にはあまりいい思い出はない。土砂降りの雨が、ホテルの窓をつたって豪快に流れて落ちていく。出かけるとすれば雨の降らないショッピング・モールということになる。ホテルのすぐ側に新しいモールがあって、パシフィック・プレイスといった。何でも揃っていて、それはそれなりに楽しい。ちょっとセントラルまで足を伸ばしてもいい。

休みの日にセントラルに出ると、雨の日でも若い女の子たちが何百人もたむろしているのに出くわ

した。みんなちょっと白っぽい服を着て、4、5人でいつまでの親しそうに話している。最初はびっくりした。何をやっているのだろうかと思議だった。天気の日、公園の芝生に敷物をしいて座り込んで食事をしたり、本を読んだりしているのだ。後で分かったことは、彼女たちはフィリピン出身のお手伝いさんたちで、休日には同郷の仲間たちと会って、自分たちの自由な時間を楽しんでいるんだそう。香港はやっぱり国際都市だになって感心してしまう。

そんな4月のちょっとした雨の合間にスタンレーに出かけた。香港の友人からちょっと変わった雰囲気のところだと聞いていた。セントラルからバスに乗って、香港島を斜めに横断していく。競馬場ののぼり、そして下っていく。バスを降りるともうそこからは歩きだ。メインの通りは細くて色んな店が連なっている。そんな通りを外れると、目の前は南シナ海だ。ちっちゃなレストランやカフェがあって、やすくて美味しいものを食べさせてくれる。薄ぼんやりした雨間の海岸を眺めながら、ぼんやりするのもいい気分だ。海風はけっこう湿気を含んでいて、寒く感じた。僕は、テラスから部屋のなかに席を替えてもらった。

スタンレーは、もともとイギリス人たちが香港から離れて、別荘のような小屋を持ったところだと聞いた。たしかにサムサッチョイやセントラルとか、ワンチャイの雰囲気とは全く違った空気がある。そう、あの喧騒がないのだ。静かな入り江と岬の町だ。お買い得の買い物は路地に続くマーケットだ。色んなものを売っている。僕は、その頃流行りだした、ウォッシュャブル・シルクのシャツを何枚か買い込んだ。コースは終わりに近づいていた。日本へのお土産だった。もうこんなところに二度と来ることはないなと思った。帰りのバスの時間をみて、僕は登り始めた。

あとがき

あとがき

あとがき

文芸社編集部の人に、「あとがき」を書くのは読者への親切だと教えられました。

確かにここまで読んできていただいて、後は筆者紹介で「おしまい」ではちょっと失礼だと思います。そこで、なぜ僕がこの文章を書き始めたのかについて話してみたいと思います。

その始まりは、遠い昔、縁あってIBMに入り、そしてイタリア、ミラノの街に住むことになった幸運と、このミラノが、その後僕の心の中で第2の故郷になっていったことにあると思います。

若かった僕が、ミラノで生活し、仕事をし、人に出会い、喜び、憤慨し、びっくりし、困り、助けられ、新しい発見をし、友達を作り、住み着いていったことに始まりはあると思うのです。さらに、その後も他のヨーロッパとか、アメリカや、オーストラリア等に滞在し、そこで現地の人たちといっしょに働き、時間を共有することによって、さらに素晴らしい体験と感動を発見しつづけることができました。

こうした間に僕の記憶に残ってふくらんできた感覚は、そこを単に通り過ぎるだけの通行人、もしくは旅人の視点とは違った、そこに住む人達の生活を、そばから感動しながら、見ている自分の視点によるものと気がついたのです。

そして、こうした国、その土地の人々、生活、仕事への取り組みかた、物の考え方などに対して、僕が感動を含めて、自然に溜め込んできたものだったのです。

そして、それを他の人たちに伝えなかったのです。とりわけ、これから可能性がいっぱいの若い人たちに対して話たかったのです。

勿論、僕自身にとっての意味は、一人旅の基本的な問題からの開放です。一人旅では、何かに遭遇し、感動しても、それをすぐそこで、他の人に伝えられない、他の人と共有できないという、大変なもどかしさがあります。こんな風につもり積もったもどかしさを、僕はこのエッセイたちに託したのだともいえます。

もう一つ最近発見したことがありました。巣立っていった僕の息子と娘に、僕が外国で感じたこと、見たことなど、いろいろなことをいっぱい、いっぱい話してきたつもりだったのですが、実はそれはやはり「つもり」で、本当はまったく話していないことに気がついたのです。

今となっては、僕の頭の中に残る記憶を紙の上にダンプして、彼らが読める形にしてあげるしかないのです。

今年の秋、楽しみにしていた中部イタリアの田舎を一ヶ月ほど、ゆっくり歩いてきました。日本の明治維新の頃にやっと統一されたイタリアですが、最後の最後まで統一に反対していたのが、このウンブリアとかトスカーナ地方です。そこには、独立都市国家、コムーネだった誇り高い町や村が、そのながい歴史を誇り、独自の伝統の香りを今もその日常生活に色濃く残していました。一つ一つが輝きながら...

その帰りにミラノで、僕は昔住んでいたアパートを33年ぶりに訪ねてみました。そのアパートは僕の記憶とおりに、昔のまんまのたたずまいで、手入れも十分されてちゃんとそこに存在していました。ミラナーゼの生活の仕方は、やはり今も変わることなく生きていました。

僕のエッセイ、お読みいただきありがとうございました。

2002年11月、秋

電子版のあとがき

2002年に発行された、紙の本が完売になりました。出版社は重版の意図はないようで、このままでは客観的な「物」としては存在しなくなります。残念なので、電子版で残すことを決めました。どうぞ、よろしく申し上げます。

著者プロフィール

著者プロフィール

著者プロフィール

徳山てつんど（徳山徹人）

1942年1月1日 東京、谷中生まれ

1961年 大阪市立大学中退

1966年 法政大学卒業

1966年 日本IBM入社

システム・アナリスト、ソフト開発担当、コンサルタントとして働く

この間、ミラノ駐在員、アメリカとの共同プロジェクト参画を経験

海外でのマネジメント研修、コンサルタント研修を受ける

1996年 日本IBM退社

1997年 パーソナリティ・カウンセリングおよびコンサルティングの

ペルコム・スタジオ（Per/Com Studio）開設

E-Mail: tetsundojp@yahoo.co.jp

HP: <http://tetsundojp.wix.com/world-of-tetsundo>

著書

Book1: 「父さんは、足の短いミラネーゼ」 <http://forkn.jp/book/1912/>

Book2: 「大学時代を思ってみれば…」 <http://forkn.jp/book/1983/>

Book3: 「親父から僕へ、そして君たちへ」 <http://forkn.jp/book/2064/>

Book4: 「女性たちの足跡」 <http://forkn.jp/book/2586/>

Book5: 「M.シュナウザー チェルト君のひとりごと その1」

<http://forkn.jp/book/4291>

Book6: 「M.シュナウザー チェルト君のひとりごと その2」

<http://forkn.jp/book/4496>

Book7: 「ミラノ 里帰り」

<http://forkn.jp/book/7278>

」

単行本の紹介「父さんは足の短いミラネーゼ」

2003年2月15日 初版発行 文芸社
ISBN4-8355-5108-7 C0095

イラストレーター 丸山 薫
デザイナー 片岡 美喜子



9784835551081

ISBN4-8355-5108-7

C0095 ¥1000E



1920095010007

文芸社

定価(本体1,000円+税)



昼間に会社のカフェテリアでアルコールが飲めるのは、フランス、イタリア、スペイン、そしてこのドイツだ。ドイツではビールは大きなジョッキでサービスしていた。僕はイタリアとフランスを知っているからびっくりはしないが、アメリカ人はそれを目にしてびっくりしていた。所変われば、だ。 (本文より)